「或は偏執の方にてかたくななり。」
「あるひは世にかはれるふるまひあり。」
「或は折節に似ぬ嗚呼あり。」
「あるひは才能に付いてそしりあり。」
「あるひは愛著についておろかなり。」
「或はすきに付いて笑はるゝあり。」
「あるひはふるまひについてくせあり。」

の八項目を分ちて一々の場合を説明してゐる。その説明は各項目みな「これは」といふ言葉で始つてゐる。まことに整然とした句法である。更にこの八項目を總括するために

「大かたかやうのことは　憍慢をもととして、心の少なきよりおこれり。」

以下を以てしてゐるのである。而して次に涅槃經の句をひき、「凡そ貧しきものゝ」で全文の結末をつけてゐるのである。文章の條理整然として實に一絲亂れざるの概がある。讀むものはよく心してその意の説かれる方法に思を到さなければならない。解釋は、結局筆者の意を酌みとる所にその要があるのであるから。

第二の(一)

列子傳といふ文にいはく、「狐丘といふ人、孫叔敖に語りていはく、『人に三怨あり。これを知るや。』叔敖いはく、『何をかいふ。』答へていはく、『爵の高きは人これをねたむ。官の大なるは主これをにくむ。祿のあつきはあたこれに及ぶ。』といへり。九條殿、右大臣を辭し給ひける時の表の文にいはく、

家好ニ儉素一。不レ奈ニ龍洞之愁一。
祿致ニ陳紅一。恐レ乖ニ狐丘之誡一。

と。文時卿のかけるとかや。

【語釋】　○列子傳といふ文にいはく云々　「列子」は鄭の人で名を禦寇と言ひ、老子の學問をまなび、「列子」といふ書物を著した。「列子傳」の傳の字は衒字であらう。二十篇より成つてゐる。こゝの話はそのうちの、說符篇に見えてゐる。「狐丘謂ニ孫叔敖一曰、人有ニ三怨一、子知レ之乎、曰何謂也、對曰、爵高者人妬レ之、官大者主惡レ之、祿厚者怨逮レ之」と。この「三怨」の事は又、淮南子、韓詩外傳等にも出てゐる。「狐丘」はその傳が明かでない。「孫叔敖」は楚の人で、海濱に隱棲してゐたが、楚の莊王に用ひられて令尹の役をつとめたと「孟子」の告子篇に見えてゐる。　○爵　支那で、周の封建の世に、それ〴〵の土地に封ぜられた大小の國君に賜はつた世襲の家格身分の稱で、公。侯。伯。子。男の五つに分けてある。これを五等の爵といふ。我國でも、華族にこの五等の爵を賜はつて、世襲になつてをる。　○高き　形容詞の連體形である。下に體言が略されてゐるとも、又

それ自らが體言の代りに使はれてゐるとも考へられる。○官　「私」に對す。政府に奉仕して事を執る役目。○祿　官に仕へてを
る者に給與される物をいふ。古は絹、綿、穀物など種々の物が用ひられたけれど、後世では、知行、扶持米、俸給をいふ。　○
あた　害をなすもの、わるものなどの意、あだとにごつてはならない。　○九條殿云々　九條殿とは、師輔の事、藤原忠平の子
である。師輔が右大臣を辭めた時とあるが、こゝに引用された句は、本朝文粹には「爲ニ九條右大臣一、請レ減ニ職封一表。菅三品」
と題して出てゐるので、辭表となつてゐるのは誤であらう。表とは官へ奉る文書の事。天曆元年閏七月廿九日、右大臣從二位兼
行右近衛大將藤原朝臣上表と終にある。　○家好ニ儉素一云々　「龍洞」とは貧薄の事をいふ寓言。後漢書の中に出てゐる。「祿致ニ
陳紅一」とは、陳は古びる事で、倉の中の祿米が年月を經て、赤くむれてくさるをいふのである。これは漢書の中に「太倉之粟、陳々
相因、紅腐而不レ可レ食」とあるによつたのであらう。「狐丘之誡」とは即ち前掲の狐丘が孫叔敖に語つた言葉をさすのである。乖く
は、もとる事、反する事。　○文時　右大臣菅原道眞の孫、高規の子。文章博士、式部大輔に至つた人。村上天皇の朝に封事を奉
り、奢侈及び賣官の禁止を切言した。天元四年從三位に叙せられたので菅三品といふ。拾遺集の作家。天元四年八十四歳で薨じた。

【通釋】　列子といふ書物の說符篇に、こんな話が見えてゐる。「孤丘といふ人が楚の國の孫叔敖に話すには『一體
人間には三つの怨があるものだが、それは如何なる事をいふか、君は御存知ですか』と。叔敖は『いゝえ、存じま
せん。どんな事を申すのですか』とたづねかへすと、孤丘がいふには『即ち人爵が高い時には、人々がこれを嫉妬
するし、又出世して役柄が重くなると、以前主人であつた人達が反感を持つて憎むし、又俸給をたくさん貰へば、
盜賊などにつけねらはれる、これ等を三つの怨といふのです』と。この話は、九條師輔公が、職封を減じて戴かう
として、官に奉つた文書の句の中に引用されてゐる。即ち

「私の家は平生から儉約質素といふ事を積極的に一つの信條といたして居りますから、たとへ俸祿が薄くて物
質的にめぐまれませんでも、少しも苦しいとは思ひません、潔く淸貧に安んじます。それよりもいたづらに祿米
を積みあげて、食べきれないまゝに赤くくさらすやうな事では、かの孤丘の誡にも反するでありませう事が、
却て心配です。」

と。この文書の文章は、三位菅原文時卿が書いたものだとかいふ事である。

【評釋】　知足安分などいふけれど、次から次へ起つて來る欲望の無限は、人間の本能で、これを整理し調節するこ
とは、なか〳〵むづかしいものである。又昔から貧して諂はないものはあつても、富んで驕らないものはないとま
でもいはれてゐるのに、位は人臣を極め、此上もない榮達をしてゐながら少しも驕らない、のみか、しかも足るこ
とを知つた九條公の、立派な心ばへをほめたのである。なほ列子の方では、こゝに用ひられた問答の次には以下の
樣な文が載つてゐる。「孫叔敖曰、吾爵益高、吾志益下、吾官益大、吾心益小、吾祿益厚、吾施益厚、吾施益博、以
是免ニ於三怨一可乎。」併せて考へてみると面白い。

第二の(二)

大方、世にある道の、煩はしくふるまひにくき事、薄き氷を踏むよりも危く、けはしき流に竿さすよりも甚
だしきものなり。莊子山を過ぎ給ふに、木を伐るものあり。直なるをば伐りて、ゆがめるをば伐らず。又人の
家にやどり給ふに、雁二つあり。主、よく鳴くをばいけて、鳴かざるをば殺しつ。明くる日、弟子莊子に申し

ていはく、「昨日山中の木は、直なるをば伐りて、ゆがめるをばきらず。又家の二つの雁は、よく鳴くをばいけて、鳴かざるをば殺しつ。よき木もきられ、よく鳴かざるをも殺されぬ」と申す。莊子いはく、「世の中のためし、これにあり。」と答へ給へり。かゝるにつけても、よく憍慢をばすてて、身を慎むべしと見えたり。文集の詩にいはく、

木雁一篇須記取。致身材與不材間。

とあるはこれなり。又陸士衡が文賦には、

在木闕不材之資。處雁乏善鳴之分。

ともかけり。又藤篤茂が句にも、

昨日山中之木。材取諸己。
今日庭前之花。詞懸於人。

【語釋】 ○大方 「十のうち八九」、「あらかた」、「ほとんど」の意味と、「おしなべて」、「ひと通り」の意味と兩樣に使はれるが、こゝでは後者の意味である。 ○世にある道 世に處する道である。處世の方法である。 ○煩はしくふるまひにくき事 厄介で世に處し難い事である。 ○薄き氷を踏むよりも危く 薄く張つた氷をふむのであるから、いつ破れて水中に溺れ落ちるかも知れない、まことに危險であるが、それよりも更に危險だと言ふのである。詩經の「戰々兢々、如臨深淵、如履薄氷」によつてかいたものである。 ○けはしき流に竿さすよりも甚だし 急流を舟に乘つて渡らうとすれば、激しい水勢のために、いつ舟が轉覆して水中に落ち込み、押し流されて了ふかも知れないから誠に危險で渡るにむつかしいものであるが、それよりも以上に處生の道は危險でむつかしいといふのである。「甚だし」といふ言葉は上の「危く」と共に、「煩はしくふるまひにくき」を受けるのである。これは白氏文集三の「巫峽之水能覆舟、若比人心是安流」によつて書いたものである。新撰朗詠集の述懐にも出てゐる。 ○莊子山を過ぎ給ふに云々 これは「莊子」といふ書の山木篇に出てゐる話である。原文を書き下してみると次の通りである。「莊子山中に行きて大木の枝葉の繁茂せるを見る。木を伐る者、其の旁に止つて取らず。其の故を問ふ。曰く、『用ふべき所無し』と。莊子曰く、『此の木不材を以て其の天年を終ることを得たり』と。夫子(門人が莊子を夫子といふのである。)山を出でて、故人の家に舍す。故人喜んで豎子に命じ、鴈を殺して之を烹んとす。豎子請ふて曰く、『其の一は能く鳴く、其の一は鳴く能はず。請ふ、いづれをか殺さん』と。主人曰く、『鳴く能はざる者を殺せ』と。明日弟子莊子に問ふて曰く、『昨日山中の木、不材を以て其の天年を終ることを得、今、主人の鴈不材を以て死す、先生將にいづれに處らん』と。莊子笑つて曰く、『周、(莊子の名)夫の材と不材との間に處らんとす。材と不材との間之に似て非なり。故に未だ累ひを免れず。若し夫れ道德に乘じて浮遊せば、則ち然らず。譽なく訾なし。一龍一蛇時と與に化す。而して肯て專ら爲ることなし。一上一下、利を以て量ることを爲す。萬物の祖に浮遊して、物を物として物に物とせられず。いづくんぞ得て累らふべけんや。これ神農黄帝の法則なり。若し夫れ萬物之情、人倫の傳は、則ち然らず。合へば則ち離れ、成れば則ち毀れ、廉なれば則ち挫かる。尊ければ則ち議せられ、爲ることある時は則ち虧く。賢なる時は則ち謀られ、不肖なるときは欺かる。胡ぞ得必ずとすべけんや。悲しいかな。弟子之をしるせ。其れ唯道德の鄉か。』以て莊子の意の那邊にあるかを察すべきである。 且つその十訓抄の本文との關係をも知るべきである。「莊子」といふ書は「莊子」といふ人の筆になつたものである。莊子、名は周といひ、蒙の人で老子の學をまなんだ人であ

る。十訓抄本文の「莊子山をすぎ給ふに」以下終りまで、殆ど同じ文が古今著聞集卷第二十魚蟲禽獸の所に出てゐる。たゞ著聞集には『「よからざる雁も殺されぬ」と申す』とあり、又「答へ給へり」より「文集の詩にいはく」までの句が無く、最後に「この一篇などは、禽獸の部に入るべきにあらず。さりながら、二つの雁のためしに、しるし入れ侍るなり。」の文がついてゐる。○直なるをば　まつすぐな木をの意。「なるは指定の助動詞「なり」の連體形で、下に體言の略された形である。「ば」は助詞「は」のにごつたもので山田孝雄氏は係助詞としてゐる。　○ゆがめる　これも「ゆがむ」といふ四段活用の動詞の已然形に完了の助動詞「り」の連體形がついたので下の體言を省いたのである。　○主　莊子のとまつた家のあるじである。　○いけて　生かして、生存せしめての意である。他動詞加行下二段活用の連用形に「て」といふ助詞がついてゐるのである。古今集の序にある「いきとしいけるもの、いづれか歌をよまざりける。」の「いき」「いけ」は自動詞加行四段活用の連用形と已然形とであるから、こゝの「いく」とは活用の種類がちがふのである。　○殺しつ　この「つ」は完了の助動詞「つ」の終止形である。殺した、殺してしまつたと譯してよい。　○殺されぬ　この「ぬ」も完了の助動詞「ぬ」の終止形で「つ」と同樣につかはれてゐる。「つ」と「ぬ」との差異は、別講「文法及び口語法」の助動詞の條下で說くつもりである。　○世の中のためしこれにあり　莊子の原文にはこれと同樣の語は出てゐないが、筆者がその意をうけて書いたものと思はれる。即ち處世の實例がこゝに示されてゐるといふ意味である。「これ」はこの莊子の伐木殺雁の話を指したのである。　○かゝるにつけても　かういふ實例の話を聞くにつけてもの意である。　○憍慢をば捨てゝ身を慎むべし　十訓の第二訓である可レ離二憍慢一事をこゝで悟らせようとするのである。　しかし莊子の原文は決して憍慢の誡などに書かれたものではなく、道德に乘じて世に浮游し、變に涉り常に通ずる道德鄉に住せんことを說いたものである。　○文集の詩　白氏文集三十四に偶作として出てゐる七律中の轉結である。新撰朗詠集にも、前の巫峽之水能覆レ舟の句と

嘆んで遇憤の所に出てゐる。詩の意味は、木を伐るのと雁を殺すとの二つの話は、よく胸にたゝみ込んで置くがよい。而して、身を世に處するに當つては材と不材との中間、材ありとて材にほこらず、材なしとて安んずべからざる、その中間にをらなければならないの意。○陳士衡が文賦　これは盧諶贈二劉琨一詩の序の中に出てゐる句であつて、陳士衡の文賦といふのは誤りである。「文選」の六に出てゐる。盧諶は范陽の人で字を子諒といつた。詩の意味は、自分の身を莊士の木にたとへていふならば、伐られずに殘つた不材の資質といふ程ではなく、多少伐られる可能性位は持つてゐる。又雁の話で譬へていふならば、善く鳴くといふので殺されずに殘された雁、その雁ほどではないが多少位は鳴けもする。つまり自分を莊士の木と雁とに例へて、十人並の器量才能は持つてゐると謙遜して言つたのである。「闕き」、「乏し」と兩方とも消極的に自分をたとへたところが面白い。　○藤篤茂が句　藤篤茂は備中掾承樂の子で官は圖書頭に至つた。これは本朝文粹の十に、「伸春於二左武衛將軍亭一、賦二雨下花自濕一」と題して出てゐる序の中の句である。和漢朗詠集の文詞及遺文の條下にも出てゐる。過去でいつて見れば、自分は、莊子山中の不材の類であるし、現在は又庭前の花を題として序文を作りながらも、花もないつまらぬ文を作つて恥かしいことである。前者は身の不材をいひ、後者は文のまづい事をいつて共に卑謙の意をのべたのである。本文の次に左の樣に出てゐる。「猥染二疎毫一、以記二勝事一云レ爾」

【通釋】　概して言ふに、この世に處して行く道は、中々免倒で、渡りにくく、薄い氷を踏み渡るよりも危險であり、急流に棹しわたるよりも更にむつかしいと言つてよい位である。それにつけても思ひだすのは莊子の話である。莊子が嘗つて山中を通つたことがあつたが、その時山中で木を伐つてゐたものがあつた。見ると、眞直な木を伐つて、曲つた木は伐らないでゐた。所が更に行つて、莊子はある知人の家に宿つたのであつたが、その時、その家に

雁が二羽ゐて、主人は客に對する饗應のためであらうか、之を殺す時に、よく鳴く方の雁は殺さないで、よく鳴く事の出來ない雁を殺したのである。そこで莊子の門弟は不思議に思つて、翌日莊子に尋ねたのである。

「先生、昨日通つた山の中では、木を伐る者が眞直なよい木を伐つて、曲つた惡い木は伐つてゐませんでした。又宿つた家の主人は、二羽の雁の中で、よく鳴くよい雁を生かして置いて、鳴くことの下手なわるい雁は之を殺しました。伐木者と雁を殺した主人とでは全く行ひ方が反對で御座いました。一體これはどちらが正しいので御座いませうか、御教示に預りたう存じます。」

これを聞いて莊子は答へて言つた。

「いや、世の中に處する道の實例が、まさ〳〵とその二人のやつた事の間に浮き出てゐる樣に思はれる。あまり材能があるといふので誇りすぎると木の樣に伐られて了ふし、それかと言つて、何も出來ない碌でなしも亦葬られてしまふものだ。處世の道の要諦は實にその中間を泳ぐことにあるのだ。この所をよく會得しなければならない。」

かういふ莊子の話から考へてみても、憍慢倨傲の心を捨てゝ、身をつゝしむことが必要だと思はれる。白氏文集の中の詩にも

「木雁の一篇をよく覺え込んで置くことが必要だ。而して自分の身を處するのに、材と不材との中間を以てする樣にしなければならない。」

と言つてあるのはこの事である。又盧諶(陸士衡の文賦とあるのは誤りである)の贈劉琨詩の序の中にも、

「莊子の木で譬へて見れば自分は不材の質を辛じて免れた位であり、雁で譬へて見れば、能く鳴くといふ程にも中々及ばないのである。」

と自分を謙遜していひ表はしてゐる。又、藤篤茂の句にも

「昨日の自分をたとへていへば、莊子山中不材のたぐひであり、今日の自分はといへば、庭前の花を題にして文を物しながらも、花といふ詞など大びらには出せない位まづいものを書いて了つた自分である。」

と言つて自らを謙遜してゐるのである。煩はしくふるまひにくいこの世をわたるには、絕えず憍慢に陷らぬ樣にすることが大切である。よく注意しないと、たゞちに薄氷をふみはづし、急流に身を溺らすに至るであらう。

【評釋】　莊子の原文は、語釋の所でも言つた樣に、全く別のことを述べたのであるが、その原意を變更して、憍慢をいましめる訓戒の話に結びつけたところに、いかにも十訓抄らしい所が表はれてゐる。鳴かずば雉子もうたれはしないのであらうが、又しても頭をあげたがるのは自讃の誇である。道德の標準の日に月に變りつゝある今日でも、かうした教訓は千古の力を持つてゐる樣である。

第二の(三)

むかし、人の心の濁れるをうらみて、つひに滄浪の水に沈み、世の政のたゞしからぬをいとひて、永く首陽の雲に入りし人あり。これ等は諫むべきを見ていさめ、退くべきを見て退ける類なり。其の性寒氷よりも潔

くして、懐寵・尸位のたとへをはなれたり。誰かこれをへつらへる臣といはん。しかるに橘倚平が詩には、

楚三閭醒　終何益。周伯夷飢　未必賢

といひて、なほ時にしたがはぬ振舞をそしれり。いはんや賢才にあらずして、人なみ〳〵に、世に立ちまじはらんやから、かたく〳〵恐れつゝしむべきものをや。すべてたかくともあやぶみ、みてりともこぼさじとなり。

【語釋】　○人の心の濁れる　人心が浮れ穢〳〵なつてゐること。　良心のしびれてゐる姿である。　○滄浪の水云々　滄浪は河の名稱であつて、漢水の異稱といふ。屈平（屈原の名は平といつた）の作である漁父辭といふのがある。全文を參考のために左に掲げて見る。

漁父辭　　屈平

屈原既放、游於江潭。行吟澤畔。顏色憔悴、形容枯槁。漁父見而之之曰、子非三閭大夫。何故至於斯。屈原曰、舉世皆濁、我獨清。衆人皆醉、我獨醒。是以見放。漁父曰、聖人不凝滯於物、而能與世推移。世人皆濁、何不淈其泥而揚其波。衆人皆醉、何不餔其糟而歠其醨。何故深思高舉、自令放爲。屈原曰、吾聞之、新沐者必彈冠、新浴者必振衣。安能以身之察察、受物之汶汶者乎。寧赴湘流、葬於江魚之腹中、安能以皓皓之白、而蒙世俗之塵埃乎。漁父莞爾而笑、鼓枻而去。乃歌曰、

滄浪之水清兮可以濯吾纓。
滄浪之水濁兮可以濯吾足。

遂去、不復與言。

又、史記の列傳には次の樣に出てゐる。

屈原名平、楚之同姓。爲懷王左徒。頃襄王時、以讒遷于江南。原被髮行吟澤畔。顏色憔悴形容枯槁。漁父問曰、子非三閭大夫、何故至此。原曰、舉世混濁、而我獨清。衆人皆醉、而我獨醒、是以見放。乃作懷沙之賦、自投汨羅以死。

又孟子の離婁篇に「孺子歌曰、滄浪之水清兮、可以濯我纓」と見えてゐる。即ち以上で分る樣に、人の心の濁つてゐるのをうらんで、滄浪の水に沈んだといふのは、この屈原のことを言つたのである。　○世の政のたゞしからぬをいとひて、永く首陽の雲に入りし人　これは伯夷叔齊のことをいつたのである。伯夷叔齊は孤竹國の君の二子である。首陽山は、支那山西省永濟縣の南にある山である。史記の周紀には

周武王伐紂、伯夷叔齊叩馬諫之。王既滅殷爲天子、天下宗周。伯夷叔齊恥之、不食周粟、隱於首陽山、作歌遂餓而死。

と出てゐる。　○これ等、屈原及び伯夷叔齊をいふ。　○諫むべき　「べき」は諫めなければならぬ義務（當然）を表はす。「べし」といふ助動詞は推量の助動詞に入れてゐるが、次の多くの用法を持つてゐる。

(一)、推量　　明日は雨降るべし。（ダラウ）
(二)、許容　　天下の義士といふべし。（テモヨイ）
(三)、義務（當然）　國民は納稅の義務に服すべし。（ハズダ、ネバナラヌ）

（四）、可能　三軍もその帥を奪ふべし。（デキル）

（五）、命令　明日出頭すべし。（セヨ）

（六）、決意　吾れ明年は必ず受驗すべし。（ショウカ）

こゝではこの（三）の意味である。諫むは伯夷叔齊をさし、退くは屈原を指してゐる。　○其の性寒氷よりも潔くして　其の性質が寒日の氷以上に、清廉潔白であることをいつたのである。石橋尙寶氏は、「詳解」の中で、本朝文粹三の、三善清行の立神祠の篇に『夷齊者、周之廉士也、性潔二寒氷一。』とあるから之に據つたものであらうかと言つてゐる。　○懷寵尸位　孝經の諫諍章の孔安國の註に出てゐる。

事レ君之禮、値二其有一レ非、必犯二嚴顏一、以レ道諫爭。三諫不レ納、奉レ身以退。有二匡正之忠一、無二阿順之從一、良臣之節也。若乃見レ可レ諫而不レ諫、謂二之尸位一。見レ可レ退而不レ退、謂二之懷寵一。懷寵尸位、國之姦人也。

即ち、懷寵といふのは、仕へてゐる身で、まさに退くべき時に當りていざさよく自分の身をひく事能はざるものをいひ、尸位といふのは、自分の仕へてゐる君に諫む可き事がある場合に、進んで諫めないものをいふのである。　○たとへをはなれたり懷寵尸位にたとへようと思つてもたとへようもない。懷寵尸位の徒とはその類を異にすることを言つたのである。　○誰か　この「か」といふ助詞は係になると共に反語の意味を表はすことがある。こゝは反語に使はれてゐるので、誰がこれ等の人々を謂つてゐる臣だといはうか、誰もそんなことをいふものはないの意。　○橋倚平が詩　橋倚平は飛騨守橘是輔の子。五位で日向守であつた。天長頃の人で、拾遺集の作家である。この詩は和漢朗詠集、述懷の所に出てゐる。楚は國名。三閭は職名である。離騷の序には「三閭之職、掌二王族之三姓昭・屈・景一。屈原序二其譜屬一、率二其賢良一、以厲二國士一。」とある。詩の意味は、楚の三閭大夫であつた屈原が、衆人の醉へる中で獨り醒め、衆人の濁つてゐる中で獨り清廉潔白であつたとしても、何の身を益し、何の己を利する事があらうぞ、周の伯夷叔齊は、首陽山に入つて蕨を食つて饑飢の生活をしたとしても、それを以て必すしも賢者といひ切る事は出來ないのである。本當の賢が賢としてみとめられ、本當の正義が正義として立てられる時にこそ、忠直清廉もよからうが、濁世に住んでは、やはり世と共に推移して、時勢に適應する生活を送つた方がましではなからうか。　○なほ　屈原や伯夷叔齊にしても、やはり人によつてはそしる人があるのである。「なほ」はそれでもやはり位の意にとればよい。　○時にしたがはぬ　時は時勢である。したがはぬは順應、適應しないことである。　○いはんや云々　屈原や伯夷叔齊でもなほ且つさうであつたんだから、まして賢才でない者は、といふ意味である。　○時に立ちまじはらん輩　世に立つ人、時勢の潮に流されて世に立つ人、時勢と交渉を持つて世に立つ人。「やから」はともがら、なかま、てあひ、といつた意味。こゝでは人々といふ位の位置であるが、多少さげすんで言つた句調である。　○かたがた　（一）あなた、こなた、かれこれ、なにやかや、さまざまの意、（二）其の方とこの方と、あちらこちらの意、（三）いづれにしても、どのみちの意。（一）（二）（三）互に意味は連絡はあるが、こゝでは（三）の意味が勝つてゐる。　○をや　「を」と「や」「さの連語。一をあげて他を推し定めるのにいふ語。上の況んやに相應じてゐるのである。　○たかくともあやぶみ云々　孝經の諸侯章にある語に據つて書いたものである。即ち「子曰、居レ上不レ驕、高而不レ危。制レ節謹レ度、滿而不レ溢。高而不レ危、所二以長守一レ貴也。滿而不レ溢、所二以長守一レ富也。」高い官などに居つても、驕ることをしなかつたならば、決してその官を脅かされるといふ樣な目には合はない。富み榮えても、矩を越える樣なことはなく、常に節制で分を守つてゐたならば、決して富のために常規を逸する樣なことはないのである。だから、高位高官にをるものは、驕慢に陷らざる禁戒心する必要があり、富み榮えてをるものは、節制して度をすごすやうなことをしない心懸が大切なのである。

【通釋】　昔、世人の心がけがれてゐるのをこゝろよしとしないで、遂に滄浪の水に投じて、自らを清くした屈原といふ人もあつた。又、世の政治が正義人道にはづれてゐるのをきらつて、首陽山に蕨を食ひつゝも餓死した伯夷叔齊といふ人達もあつた。これ等の人達は、諫めなければならない有樣を見ては、面と向つて諫を呈し、自分の身をひかなければならない場合に際會しては、いさぎよく身をひいた人達であつた。その性情たるや、實に寒日の氷よりも潔白であつて、懷寵尸位などいふ類を遠く超越してゐるのである。誰がこれ等の人を目して、へつらつてゐる臣であるなどといふものがあらう。そんな人は誰一人としてある筈はない。それであるにも拘らず、例の橘の倚平は詩で、

「楚の屈原は、衆人より超然として、その濁りに染まず獨りその潔白を守るために死んでしまつたのであるが、果してそれが彼自身にとつて何の益をもたらしたであらうか、又周の伯夷は、不正の君の粟をはむをいさぎよしとしないで、首陽山に蕨を食つて遂に餓死して了つたのであるが、これ又必ずしも賢者といふことは出來ない。共に世と順應して推し移るの賢なるには及ばないではないか。」

と歌つて、かゝるすぐれた人達をさへ、なほかつ時に順應しない點でそしつたのである。況して、屈原や伯夷叔齊などと比肩するにも足りない人達であつて、十人なみに、誰でもとるやうな態度で、世に立つてゆかうといふ樣な人達にとつては、どのみち、謹嚴な態度を持して行くことが必要なのは言ふまでもない。概言すれば、誰人に拘らず、よし高位高官に居るとしても、常にそのために憍慢に陷らぬやう戒心を必要とするし、又よし富貴繁榮の境にをるとしても、絕えずそのために、常規を逸して餘弊に墮することがない樣注意しなければならないことである。

【評釋】　今日の人倫道德から論ずるならば、屈原又は伯夷叔齊のとつた道には、聊か消極的の嫌ひがあつて、さかくの批難を加へ得る餘地はあると考へられるが、元來憍慢をいましめるといふのが第一目的である條下の例話としては、これを一つの標準とすることに敢へて欠くるところは無いと思はれる。高きは高きを鼻にかけ、權力あるものは權力を濫用し、富あるものは、その財力に阿つて、やゝもすれば正しい道をそのために外れ勝ちであるのは、ひとり鎌倉時代ばかりではない。昭和の今日に於てもなほ且つ然りである。歐洲大戰前に於ける獨逸はどうであつたか。或は海を超えて目を東西に放つならばその生きた例がまざ〳〵と我等の前に横つてゐるのである。大はさて置き、これを一國内に限つて見ても、これに類する事例に決して乏しくはないのである。消極は一面積極の母であるとも考へられる。誰かこの考を詭辯的と笑ひ得ようぞ。古來の我が國の教訓の中には、含蓄ある教訓の多い事を知らなければならない。「すべてたかくともあやぶみ、みてりともとぼさじ」この語には十分かみしめて味つてみる價値が含まれてゐる。

第二の（四）

文集一卷の囚宅の詩には、「驕は物の盈てるなり。老は數の終りなり。」ともいふ。同じ四卷の杏爲梁には、「儉なるは存し奢れるは失すること、今日にあり。」とも書かれたり。しかのみならず、吳王夫差の姑蘇臺、秦

の始皇帝の咸陽宮、おごりをきはめ、うるはしきをきはめたりしも、あたのためにほろぼされて、子孫につたふる事なかりき。源順が河原院の賦に書けるこそ、いとあはれにおぼゆれ。

強吳滅兮有荆棘。姑蘇臺之露瀼〻。
暴秦衰兮無虎狼。咸陽宮之煙片々。

中にも唐の太宗の御時、魏徵が德政の三つの品を定め申しける詞に

焚鹿臺之寶衣。毀阿房之廣殿。
懼危亡於峻宇。思安處於卑宮。
則神化潛通。無爲而治。德之上也。

とありけるを、貞觀政要に書かれぬるこそ、儉約の政のあるべきやう、いみじうめでたけれ、此は帝道の一事には限らず庶人のふるまひに至るまで、此の心をもてとなり。鹿臺・阿房は、殷紂・秦皇二世等の宮室なり。

【語釋】 ○囚宅の詩　白氏文集卷一の囚宅の篇の中にある詩、「權重持難久、位高勢易窮、驕者物之盈、老者數之終。」權勢が重ければ、之を持することは中々むつかしくて、長續きのするものでない。位が高いといふとその勢力はやがてその力を失ひ易いものである。驕慢は物の盈つる所から來る結果であるし、年老は齡の重りすぎた結果到達した最後のところである。○奢爲梁　白氏文集四卷の奢爲梁の中にある七言古詩に、「儉存奢失今在目、安用高墻圍大屋」とある。質素儉約するものは長く續くし、奢侈驕慢なるもの、早く亡んでしまふことは、實に手近い眞理であつて、眼前決して實例に乏しくはないのである。

高い墻をめぐらして大屋の久しく保つことを望むよりも、儉を以て之を存するに如くはないのである。　○吳王夫差の姑蘇臺　夫差といふのは吳の國の王で闔廬の子である。姑蘇といふのは春秋戰國時代の吳の國の都である。後の江蘇省の蘇州府である。張繼の楓橋夜泊の詩によつて有名な姑蘇城はその城である。姑蘇臺は、吳王夫差が越を伐つて得た美人西施を置くために築いた三百丈の高臺である。史記の吳世家には次の樣にある。「吳王夫差破越、越迫西施請退軍。吳王許之。既得西施甚寵之。爲築姑蘇臺、高三百丈。游宴其上。子胥諫曰、臣恐姑蘇不久、爲麋鹿之遊。後越伐吳、遂見焚。」　○秦の始皇帝の咸陽宮　秦王、政は東洋史上の一英主である。六國を滅して支那本部統一の君となつて自ら始皇帝と號し、戰國以來の國都である咸陽(陝西省)に都した。皇帝の尊號はこの時に始まつたのである。咸陽には壯麗なる宮殿咸陽宮を造り、諸侯から得た美人をこゝに住まはせ、奢侈を極めたのであるが、後、江東に起つた楚の遺臣項羽のために宮殿は焚かれ、その火が三月の間消えなかつたといふ位である。詩人曾鞏の虞美草詩の中に「咸陽宮殿三月紅」といふ有名なる句があつて、十萬の兵が血を流した事を思はせてゐる。始皇帝が「二世三世と數へて萬世に至り、之を無窮に傳へん」と大言壯語した秦の天下も、帝の死後三年で滅んでしまつたのである。　○源順が河原院云々　源順は後撰集の撰者の一人。河原院を興したのは源融。臺閣水石、實に立派なる庭で、毎月難波の潮二十斛を汲ましめ、陸奥の鹽釜浦になぞらへた。故に源融を世に河原左大臣と稱してゐる。源順は嘗つて、河原院の賦を作つて、融の驕奢を諷した。これは本朝文粹一に「奉レ同二源登才子河原院賦一」として出てゐる。こゝにひいてあるのはその賦中の文句である。次にかう出てゐる。「何唯涼風坊中、一河原院而已哉」　○強吳滅兮云々　強國吳も滅んでしまつては、さしも立派であつた姑蘇臺も焚かれその跡には徒らにいばらの類の繁りてゐるばかりで、合つて、たゞ置く露ばかりが多いことである。瀼々といふのは露の濃なることを形容した語である。　○暴秦衰兮云々　暴虐を逞うした秦の國も

滅されて了つては、虎狼の姿又何處にか求めん、かの豪を極め壯を極めた咸陽宮も、敵の兵火に焚かれて一片の煙と化し去つてしまつたのである。榮枯盛衰世のならひとはいへ、まことに常なきはその委であることよ、と傷んだ詩である。○唐の太宗　唐の高祖(李淵)の子で、唐國の實際の創業者である。李世民といふ。非常なる英主で、その治を貞觀の治といふ。貞觀といふのは太宗の時の年號である。　○魏徵　字は玄成、太宗に仕へて諫議大夫侍中となり鄭國公に赴ぜられた人。太宗の顧問であつた。太宗と政治に就いては大に論をたゝかはし善政をすゝむることが多かつた。　○德政の三つの品　道德を以て政治の要諦となすに就いての三階級のこと。上中下三段の區別をたてゝ德政を論じたので、貞觀政要(唐の太宗の嘉言善行、眞法善政等を、史臣の吳兢が編類した書で十卷ある)の君道篇に出てゐる。　○鹿臺之寶衣　鹿臺といふのは殷の紂王の作つた臺(四方を眺めるために作つた高いうてなのこと、樓閣と言つてもよい)で飾るに瓊玉を以てし、その大さ三里に亘り、高さ千尺に及ぶといふ。周の武王が殷を討つた時、紂王はこの臺閣に登り、寶衣を珠玉にきせて自ら燒死した。武王は鹿臺の財寶を散ぜしめたといふ。　○阿房之廣殿　阿房は秦の始皇帝が、渭南の上林苑中に作つた宮殿の名。東西五百歩、南北五十丈、上は以て萬人を坐せしめることが出來、下は五丈の旗をも建てることが出來る程の大きさであつた。阿房はもと地名である。杜牧之の阿房宮賦は有名である。阿房宮を知らうと思へば是非一讀すべき文章である。この阿房宮も楚のために燒かれてしまつた。　○懼二危亡於峻宇一　峻宇は天にも屆くやうな高大な樓閣をいふ。さういふ樓閣を築いたとしても、やがて崩壞の運に會することは知れてゐるんだから、峻宇など築いて自ら危亡を招く樣な愚を行はない戒心が心要であるとの意。　○思二安處於卑宮一　卑宮は前の峻宇に對して極めて質素なるたてものをいふ。峻宇をたてゝ危亡に會するを憂ふるよりは、卑宮を以て心を安らかにする方がいくらましだか知れないのである。論語の泰伯篇に、「卑二宮室一而盡二力乎溝洫一、禹吾無二間然一矣。」と出てゐる。禹(舜帝に仕へた賢臣である)は宮室は

どは極めて粗末に作り、力を專ら溝洫(田畑の間にあるみぞのこと)のために致し、以て民のためにつくしたので、孔子も、禹に就ては何等一點の批難を加へる餘地がないと言つて賞讃したのである。　○神化潛通　神化は天子の德化をいふのである。潛通とはその德化が天下にひろく及ぶことをいふ。○無爲而治　無爲といふのは自然のまゝで人工的に作爲を加へないことをいふ。天子の德化が天下に敷き及んだならば、何等强ひるところ無くして自然に治績はあがるのである。　○德之上也　德政のうちの最上級であるといふ意。　○本文全體の意味は通釋にゆづる。　○儉約の政のあるべきやう　儉約の政を行ふ際にやらなければならない態度のこと。　○帝道　天子が人民に臨んで政治を行ふ道。　○庶人のふるまひ　一般人民の日常生活の一擧一動をさすのである。　○宮室　天子の御殿宮殿をいふ。

【通釋】　白氏文集卷一の凶宅篇にある詩の中に、「驕りは物の飽滿したところから來る結果であるし、老年は齡を重ね重ねた結果到りついた最後の數である。」と歌つてある。又、同じ文集の卷四の杏爲梁篇に出てゐる詩の中には、「儉を以て身を持するものは長く續くし、奢るものが早く亡んでしまふことは、實に手近き眞理であつて、眼前その實例に乏しくないのである。」とも書かれてゐる。そればかりではない、支那の歷史にその例を見るがよい。吳王夫差の築いた姑蘇臺はどうであつたか、秦の始皇帝が營んだ咸陽宮はどうであつたか。いづれもその盛時にあつては、心のまゝなるおごりを極め、美麗豪壯、その極をつくしたのであつたが、何れも、賊や敵のためにほろぼされてしまつて、子孫に傳へる事が出來なかつたではないか。「二世三世と數へて萬世に至り、之を無窮に傳へん」と豪語した始皇帝の天下はどうであつたか。帝の死後僅か三年にして亡ぼされてしまつたではないか。梨壺の一人

であつた才人源順が、河原左大臣源融の築いた河原院の驕奢を難じた「河原院の賦」に書いてある詞を讀んでみれば、まことにその事がしみ〴〵と感ぜられるのである。

「强國とうたはれた吳の國も一朝敵に滅ぼされてしまつては、姑蘇臺も灰燼となつて、廢墟徒らに荆棘の繁るにかませ、置く露のみしげくして昔の榮華を語りがほである。英雄强國いま何處にあるか、更に虎狼もたゞならずといはれた秦も、忽ちにして衰へては、虎狼の暴威はた如何にせん。咸陽宮も亦兵火にやかれて、一片の煙と化し終つたではないか。英主强兵いま何處にありや。荆棘の露、片々たる煙烟、空しく榮枯盛衰、諸行無常のすがたを語るにすぎないではないか。」

文集をよみ、河原院の賦を見て、更に貞觀政要にかゝれてゐる、唐の太宗の時に於ける、魏徵が德政に關する三階級に就いての詞に目を轉ずれば、今更のごとく、儉約の政のしかあるべきを思はせられて、よくも言つたといとも尤もに感ぜざるを得ないのである。その詞はかやうである。

「殷の紂王が鹿臺寶衣は之を火にまかせもよい。秦の始皇帝が阿房宮の廣殿は、之を敵の破壞せしむるにまかせてもよい。いづれも帝王の心とすべきものではない。それならば帝王の常に念とすべきは何であるか。それは外でもない。奢侈の心を禁じ、廣大なる土木などを必要もないのに起してやがて亡んでしまふ樣なことは絶對に避けることだ。而して宮殿などは粗惡でもよい、一身に奉ずることは薄くてもよい。もつと大切なる王道を行ふことに心を注がなければならない。それは危急を逃れる安處であるばかりでなく、帝王に天の命ずる安處ででもあるのである。かくする時はその德化下に及んで天下はなすなくして治まるのである。これが德政の第一等である。」

これは帝王の道に就いて言つたことであるが、必ずしも帝王の道に關する一事だけではなく、一般の人間の日常生活にも通じて持つべきは、驕奢を斥けて儉約を大事とする心である。右の文中の鹿臺、阿房といふのは、殷の紂王、秦の始皇帝の宮殿の名稱である。

【評釋】　白氏文集の凶宅篇、杏爲梁篇にある詩句をひき、更に河原院の賦をあげ、貞觀政要の文言を示して、憍慢を斥け儉約を說いたのである。まづ抽象的の敎訓より、姑蘇臺、咸陽宮、河原院、鹿臺、阿房宮等具體的の實例によつてその趣旨を徹せしめようとしたのである。しかもその主とするところは、帝王の驕奢に關するいましめにあるのだが、庶人のふるまひにまで及ぼさうといふのである。なほこの次には、後世菩提の佛果を得るためにも、おごれる心を離れる事が大切だと法華經の文言を引用して說いてゐる。驕慢といふのは必ずしも物質的にばかりいふのではない。その根本は精神にあるのである。心にあるのである。何ぞ必ずしも不急の土木建築をのみさすのであらうや。

第三、不レ可レ侮ニ人倫一事

或人いはく、人をあなづる事は、色かはれど、かならずある事なり。あるひは貧しくいやしきをも慢り。あるひは不覺なるをもあなづり、あるひは我よりさがれるをもあなづりて、することをもいふ事をも、さばかり

にこそとおもへり。あるひはしたしみむつるゝをもあなづり、大方不運なるものをば、行ふ所の事がらよからぬやうに思ひ、いやしきものは、ふるまひとふるまふ事、いたづらごとと思へり。これは無智の人のある事なり。これによりて、いふまじき言をもいひ、すまじきわざをもふるまふほどに、あなづるかつらにたはぶれして、思はざるほかのはぢがましき事にもあひ、いとはるまじきものにもいとはれぬれば、人にかろくおもひけたれ、心おとりせらるゝなり。孤兒・寡婦なりともあさむくべからず。おもく本文の心を信ずべし。人にとりてかたくつゝしむべし。

【語釋】 ○色かはれど　色はいろ〳〵の色である。これをこゝでは「しな」と讀む。色品といふもよい。樣々事情は異るにしても、或はその外面に表はれる狀態は異るにしても位の意である。 ○貧しくいやしき　「貧しく」は「貧し」(形容詞)の中止形である。下に「いやしき」に對して中止形をとつてゐるのである。「いやしき」は連體形であつて下に「人」とか「者」とかいふ體言を省略した形である。 ○不覺なるをもあなづり　精神のたしかならざるものを不覺といふ。こゝでは智識才能の十分でないものを輕蔑することである。 ○我よりさがれる　「さがれる」とは何がさがるのか分明でないが、自分より劣つてゐるものを漠然と言つたのではないかと思ふ。內容の中で身分に關するものはさきに「貧しくいやしき」と指し、才能に關するものは「不覺」の條でいつてある。而してそれ等は一般的に言つてあるので、こゝではそれを自分に比較して言つたのだと思ふ。だから內容は詮議しないで、程度だけに考へたらよからうと思ふ。 ○することをもいふ事をも　「する」「いふ」は誰が「する」「いふ」のかといへば、前にあげた貧しくいやしき人、不覺なるもの、劣れるものである。あなづられる方である。 ○さばかり　然許、それほど、さほど。程度を輕く、「あれ位のこと」と思ふのである。 ○しみしみむつるゝ　親しく相馴れてゐる者をいふ。「むつるゝ」は下二段

の動詞の連體形。「むつぶ」は意味は同じでも上二段活用である。「むつる」の意味は親しみ馴れつくである。 ○不運なるものの本義はふしあはせ、不幸、薄幸なるものをいふ。しかしこゝらでは、さきにのべた不覺位の意味に使つたものかと思ふ。 ○ふるまひとふるまふ事　この「と」は「ありとあらゆる」等の「と」と同じで重ねて言ふのである。ふるまひとしてする事全てをさす意味。なす事行ふ事すべてをいふのである。 ○これは無智の人のある事なり　かういふ事柄は無智の人に多い事柄であるの意。「ある」はさういふ思ひをする樣な狀態に無智の人があるといふ意にもとけるし、さういふ思ひをする事は、無智の人にある事だとも解ける。併し私はこの「ある事」を「ある樣」と同じにとつて有樣の意に解し、これは無智の人の常にある狀態であるといふ意味にして置く。 ○いふまじき言　いつてはならない言。この言は言葉であつて事ではないのに注意を要する。「あんなことを言つてゐる」の「こと」も本來はこの言であらう。「まじ」は推量して打消す助動詞。その連體言が「まじき」である。このあたりでは推量よりも否定の意味の方が遙かに強くて「言ふべからざること」の意に近い。 ○ほどに　そのうちに、そんなことをやつてゐる間にの意。 ○あなづるかつらに　石橋尙賓氏の「十訓抄、詳解」には「意義定かならず。或はつ文字は衍にて、あなづるからにならんか。但し室町時代の小說鴉鷺合戰物語には「先途の合戰はあまりに敵をたやすく思ひて、あなつる葛に倒されつ」といふ語あれば、研究資料としてかゝげつ」とある。改修の「言泉」中「かづら」の條下には「侮る葛に倒さるゝ」といふ句をあげて「輕んじ、油斷して、不覺をとる。侮る金木で目を衝く。」とし「諺語」としてある。藤井乙男博士の「諺語大辭典」の中にも「アナドリ葛ニ倒レスナ」をあげ「葛を侮りてこれが爲に倒さるゝこと勿れとの意。」とし、「海草」の中に「あなづる葛に倒れあり。」とあると載つてゐる。又、「アナヅル葛ニ倒サレル」を擧げて、「相手を輕蔑して不覺をとる喩」と說いてある。かういふ事から考へてみると、「つ」を衝字としないでも、語呂上の技巧として「つる」「かつら」を連ね、以て內容上も、蔓葛の連絡を保ち、諺の樣な意味をなしたものだと思ふ。 ○思はざるほか　思ひの外と同意である。さうすると、「ざる」といふ否定の意味

がなくなるではないかといふ疑問が起る。しかしこれに似た例は外にもある。「けしからず」を「けしかり」と同意に用ひ、「おぼろげならず」を「おぼろげ」と同樣に使つた例もある。從つてこの場合の「す」「ざる」は否定といふよりも寧ろ形容詞的に使はれたのかと思はれる。尤も「思はざる外」の「思はざる」は「外」といふ體言を修飾してゐるのであるが、「思ひの外」の「思ひ」が連體格に立つてゐるのとは多少趣がちがふ。前者は「思はざる」所が即ち「外」なのであるし、後者は「思ひ」即ち「外」ではない。「思はない」所が「外」なのである。同じ形容詞的修飾語でも兩者の間にちがひがあつて、意味は同じになるのである。　○はちがましき事　恥らしく思はれる事、恥と見える事である。　○いとはれぬれば　「いとは」は「いとふ」(八行四段活用)の未然形。「れ」は「る」(受身の助動詞)の連用形。「ぬれ」は完了の助動詞「ぬ」の已然形である。　○おもひけたれ　この「れ」も受身の助動詞である。「けた」は「けつ」四段活用の未然形。「けつ」は消すと同じ意味である。　○心おとり　豫想よりも劣りざまに思はれること。心まさりの反對である。　○孤兒寡婦　幼にして親無き子を孤兒といひ、寡婦は夫を失つた女をいふ。晉書及び貞觀政要に孤兒寡婦を欺くといふ樣な語が見えてゐる。　○あざむく　こゝはたばかりすかす意味ではなくて、人をあなどり、そしる意味である。　○本文　こゝに記されてゐる文句をいふ。本文の心とは本文の精神の謂でおる。　○人にとりて　人としてはの意。人間の道を行ふものとしてはの意。

【通釋】　或る人が言つた。人をあなづり輕しめるといふ事は、その場合〳〵によつて樣子はちがふにしても、誰にでも必ずある事である、と。なる程その通りである。或時には、貧しいからと言つては人をあなづり、身分がひくいからと言つては人を侮り、或時には、才智藝能が十分ないからと言つて人を侮り、又、何かにつけて自分より劣つてゐるといふのでその人を侮るのである。而してそれ等の人達のする事なす事、さては口に出して言ふ事をも、「あれ位の事しか出來ないんだ」と侮蔑し勝ちである。更に或者は、自分と親しく馴れ睦んでゐる人をもあなづり、誰でも不運な者だといへば、その行ふ事がらがよくない樣に考へ、身分の賤しいものは、する事なすことが萬事萬端、つまらない事だと思つてゐる。これは無智の人がよくやる事である。まことによろしくない事である。何事をも輕蔑する樣な心が根本にあるといふと、やがてしらずしらずの間に、口に出してはならない事をも口に出し、してはならない事をもしでかす樣になるものである。而してそんなことをしてゐるうちに、そのあなづり心の圖に乘つて、つひ思ひもかけなかつた恥辱めいた事をも身に受け、きらはれる筈のない人からもきらはれる樣な結果を招くのである。さうなつてしまふといふと、やがて他人からも尊重される點がなくなり、又案外つまらない奴だなどと思はれもするのである。たとへ孤兒寡婦であつたとしても、之を輕蔑する事はよろしくない事である。よく〳〵この意味、こゝにかゝれてある精神を信じて體得しなければならない。人をあなどるといふ事は、人倫を行ふ上に當つて、よく〳〵つゝしまなければならない事である。

【評釋】　第三訓の序文である。まづ人をあなづる事の誰にもある事を道破し、それが具體的に現れる一々の姿を摘記し、更にそれより來る恥辱の災を說き、「人にさりてかたくつゝしむべし」と結んだ四段の結構、寸分のたるみも無い。

第三の(一)

二條よりは南、京極よりは東は、菅三位の亭なり。三位うせて後、年比へて月のあかき夜、さるべき人々、むかしの跡をしのびて、かしこにあつまりて、月をもてあそぶ事ありけり。をはり方に、或人「月はのぼる百

尺の樓」と誦しけるを、人々聲をくはへて、たび〳〵になる程に、荒れたる中門のかくれなる蓬の中に、老いたる尼のよに怪しげなるが、露にそぼちつゝ、終夜聞きをりけるが「今夜の御遊、いとゞめでたくて、涙もとゞまり侍らぬに、此の詩こそ及ばぬ耳にも、僻事を詠じおはしますかなと聞き侍れ」といふ。人々わらひて、「興ある尼かな。いづくのわろきぞ」といへば、「さ候ふなり。誠にさぞおぼすらん。されど思ひ給へ。月はなじかは樓にはのぼるべき。月にはのぼるとこそ故三位殿は詠じ給ひしか。おのれは故殿の物はりにて、おのづから承りしなりといひければ、人々恥ぢて皆立ちにけり。これはすゝみて人をあなづるにはあらねども、思はぬ外の事なり。これらまでも心すべきにや。藪にかうの物といへる兒女子のたとへ、むねをたがへさりけり。

【語釋】　○二條　京都の二條通りである。平安京は北は一條から南は九條にいたり、東は京極から西は西京極にわたつて作られた。二條より南、京極より東といふ地點は今の京都に於ても同名によつてたどる事が出來る。○菅三位　これは第三講でも言つた樣に菅原文時のことである。所がこの同じ話が江談抄七及び今昔物語集の卷第二十四に出てゐる。これによると大江朝綱の話になつてゐる。朝綱のことを「江三位」といふからこれから誤つたものであらうか。別項評釋の條下參照。○亭　家のことである。邸宅のことである。　○月のあかき夜　月のよく照つてあかるい夜である。あかいは赤いではない、明いである。　○さるべき人々　しかるべき風流心のある人々の意。　○かしこ　菅三位(實は江三位)の邸である。　○月をもてあそぶ　月を賞翫しつゝ詩歌管絃の會など催す事をいふ。　○月はのぼる百尺の樓　江談抄(群書類從卷第四百八十六、雜部四十一に出てゐる)第四に「踏レ沙披レ練立二清秋一月上二長安百尺樓一。」とあつて「文集。八月十五夜詩」と註がついてゐる。しかし白氏文集にはこの詩は無い。當時白氏の詩と稱して實は白氏の詩で無いものも隨分ある樣であるから、これも誰か別人の詩を白樂天に附會したものではあるまいか。詩人としての白樂天の權威に附會したものゝ一ではなからうか。なほ後考の要がある。參考のために「江談抄」のこの所を引用してみる。(群書類從本によつて)

踏レ沙披レ練立二清秋一、月上二長安百尺樓一。　文集。八月十五夜詩。

此詩。朝綱卒去之後送二數年一。於二相公二條京極梅園舊亭一。八月十五夜時。好士有□輩。慨レ月到二彼梅園舊亭一。有二老比丘尼一人一出來天問曰。誰人令レ遊給哉。故宰相殿之人遺二唯尼一人一也。彼家奴共夭死。尼亦不レ知二明旦一云々。好事人々聽以感歎拭レ泣。然間尼云。抑月ハ上ル長安ノ百尺樓詩。不レ似二往日相公之詠一。月ニトコソ被レ詠シカ。只古也。月ニヨリテ上二百尺樓一也。月ハナニシニ樓ニハ可レ登ゾト云ニ。人々皆信伏レ問レ尼。答云。故宰相殿ノ物語ナリ。依人々各給二纏頭一。終夜語了。相公之諷詠珍重云々。(物語は物張の誤であらうかと思ふ)

○聲をくはへて　それに合唱すること。　○中門　廏殿造の表門と寢殿との間にある門のこと。　○かくれ　物かげになつてゐるところのこと。　○よに　副詞で二つの意味がある。(一)世の中にとりわきて、世になく、ことのほか、いみじく。(二)決して、きつと、更に、よもや。こゝでは勿論(一)の意味である。　○露にそぼちつゝ　露に濡れながら。　○いとめでたくて　まことに結構な御催での意。　○及ばぬ耳　尼自ら聞けることを謙遜していふのである。物のわからない私の耳にもの意。　○僻事　まちがつたこと。たゞしくないこと。　○興ある尼　面白いことをいふ尼。　○さ候ふなり　さ樣で御座います。　○誠にさぞおぼすらん　本當にどこに惡い所があらう、と御思ひになるでせう。　○なじかは　どうして、何として。　○詠じ給ひしか　詠ぜられた事であつた。「しか」は上の係助詞「こそ」の結び。時の助動詞、過去を表はす「き」の已然形である。　○物はり　衣をそめ、又その裁縫などに從事する者。類從本の江談抄に物語とあるのは「物張」の誤であらう。石橋氏の詳解にはなほしてある。　○おのづから　別段强ひて聞かうとはしないで、自然に耳に入つたのである。　○思はぬ外　前にあつた思はざる外と同意であ

る。 ○藪にもかうの物　野夫の中にも剛の者の譬にて、つまらない者の中にも取るべきものゝあること。又藪醫者の中にも功者なるものもあること。一說には、尾張國熱田の阿波手の森の竹林中にて、近村の農夫の蔬菜を漬けて熱田の社に奉献するからいふといふ說が「尾張名所圖繪」に出てゐる。同じこと俚言集覽にも見えてゐる。即ち「南嶺子に藪にも香の物といふ事は、庸醫にも功者ありと云ふ諺とのみ思ひしに、予尾張にありし時、名古屋より津島へゆくとて、海東郡を通りしに、阿波手の森といふ所に、藪の中に壺をふせて、往來の瓜茄鹽の賣人、その我が賣物を納め置く。香の物自然に熟して、瓜茄に蕃穢を少し加へて、毎年極月二十五日に、熱田社の煤拂と、二月の初午の日、神供に献ず云々。此の香の物よりいひ弘めたる事にこそ。又毛吹草に、やぶにも剛のもの、こは剛字を用ひたれば、香の物にはあらす。十訓抄の意は、剛者の譬に似たり。然れどもかうの香と、物字を書きたるは後の書寫のわざなるべし」。

【通釋】　京都、二條通から南の方、京極より東の方は菅三位の邸である。三位（實は菅原の文時ではなくて大江朝綱であるが）がなくなられてから以後、何年か經つての話であるが、月のあかるい夜（江談抄では八月十五日だと言つてゐる）、然るべき人達が、むかしありし朝綱公のあとをしのんで、その舊邸に集つて、月を賞翫しつゝ詩歌の會を催して一夜をすごしたことがあつた。その月前舊邸の遊びも終らうとする時、或人が聲をあげて「月はのぼる百尺の樓」と吟誦したので、外の人達も聲を合せて、度々うたつたので、そのうちに、荒れ果てゝゐる中門の蔭に生ひ茂つてゐる蓬（よもぎ）の中で、年老いた尼で如何にも見すぼらしいものが、夜露にぬれながら、終夜そのあそびを耳にしてゐたのであつたが、その尼が、

「今夜の御催しは、まことに結構で、感涙にむせばれずにはうかゞへなかつたのですが、唯今吟誦になりましたあの詩だけは、不束な私の耳にも、まちがつた事を御吟じになるものかなと、聞いた譯で御座います。」

と言つた。人々は之をきいて笑ひながら、

「面白いことをいふ尼さんだなあ。一體どこがわるいんだね。」

といふと、尼は再び言つた。

「左樣で御座います。本當にどこに間違なぞがあるものかと思召すで御座いませう。然しよく考へても御覽なさいまし。月がどうして樓へのぼつたり致しますものか。登るのは人では御座いませんか。だから『月が照るので樓にのぼる』といふ意味で『月にはのぼる』とでなくなられた三位殿も御詠じになりました。私は故殿の御邸に仕へてをりました洗濯女で御座いますので、自然さうした吟咏の御聲なども聞き覺えてをるので御座います。」

これを聞きまして、人々は如何にも尤もと、吟誦の誤りを恥かしく思つて皆歸つてしまつた。これは、人々が自ら進んで他人を輕蔑侮辱したといふのではないけれども、思はない事で人をあなどつた事になつたのである。かうした事に就いても、あなどりに對する注意の一方面として絶えず心をかけてゐなければならないのであらう。つまらない者の中にも、理にあつた事をいふ者がゐる事は、例の「藪に香の物」といふ婦女子への俚諺の通り、全くちがひのない事であると思はれる。

【評釋】　參考までに「今昔物語」卷第二十四、第二十七の話を載せて見れば次の通りである。（日本文學大系本による）

大江朝綱の家の尼詩の讀みを直す語

今は昔、村上天皇の御代に大江朝綱と云ふ博士有りけり、止事なかりける學生なり。年來道に付きて公に仕へけるに、聊かに心もとなき事なくして、遂に宰相まで成りて年七十餘にして失せにける。其の朝綱が家は二條ミ京極とになむ有りければ、東の川原遙かに見て渡りて月朧く見えけり。

而るに朝綱失せて年を經て、八月十五日夜の月極じく明かりけるに、文章を好む輩、十餘人伴ひて月を翫ばむが爲に「去來故朝綱の二條の家に行かむ。」と云ひて、其の家に行きにけり。其の家を見れば蒼く荒れて人氣たし。屋共も皆倒れ傾きて只煙屋許り殘りたるに、此の人々壊れたる緣に居竝みて月を興じて詩句を詠じける中に、「踏沙披練立清秋、月上り長安百尺ノ樓」と云ふ詩は、昔唐に□□云ひける人八月十五夜に月を翫びて作れる詩なり。それを此の人々詠じけるに、亦故朝綱の文花の微妙なりし事共を云ひ語りける間、丑寅の方より尼一人出で來て問ひて云はく、「これは誰人の來て遊びたまふぞ。」と。答へて云はく、「月を見む爲に來れるなり、亦汝は何なる尼ぞ。」と。尼云はく、「故宰相殿に仕へ□人は尼一人なむ今に殘りて侍る。此の殿に男女の仕へ人其の員侍りしかども、皆死に畢て己一人今明とも知らで侍るなり。」と。道を好む人々はこれを聞きても哀れに思ひて、尼を感じて或は泣く人も有りけり。

而る間尼の云はく、「抑殿原の月は長安の百尺の樓に上れりと詠じ給ひつる、古、故宰相殿は、月に依りて百尺の樓に上るとこそ詠じ給ひしか、これは似侍らず、月は何しに樓には上るべきぞと、人こそ月を見むが爲に樓には上れ。」と云ふを、此の人々聞きて涙を流して、尼を感ずること限りなし、「抑尼は何者にて有りしぞ。」ミ問へば、尼、「己は故宰相殿の物張にてなむ侍りし、それが常に聞きし事なれば、殿原の詠じ給ふ時に鄙か

に思え侍るなり。」と云へば、人々終夜此の尼に談じて、皆尼に纏頭してなむ曉に返りける。

これを思ふに、朝綱の家風彌重く思え、云ふ甲斐なき女すらかくの如し、況んや朝綱の文花思ひ遣るべしとなむ、語り傳へたるこや。

この語をみれば、本來は、朝綱公の文事に志のあつかつたことを記したものであるが、十訓抄では、これを教訓化してとりあつかつてゐるのである。即ち、何の辨へも無ささうな洗濯女だつて、中々侮れないといふ意にして、侮蔑には積極的にやるものと、かうした消極的に知らずしらずやつてゐるものとの兩樣があるのである。天地神明に恥ぢないのが本當の公明正大な心である樣に、侮らうとしないものを本當に侮つてゐない境地に立ち得て、眞の不可レ侮ニ人倫一事の本旨に叶ふ譯であらう。

第三の(二)

近來、最勝光院に、梅さかりなる春、故づきたる女房一人、釣殿の邊にたゝずみて、花を見る程に、男法師など、打ちむれて入りきたりければ、こちなしとや思ひけん、歸り出でけるが、着たるうすぎぬの、事の外にきぼみすゝけたるを笑ひて、

花を見すてゝかへるさるまろ

と連歌をしかけたりければ、とりあへず、

里まもるいぬのほゆるに驚きて

と付けたりけり。人々恥ぢて逃げにけり此の女房は、俊成卿の娘とて、いみじき歌よみなりけるが、ふかく姿をやつしたりけるとぞ。

【語釋】 ○最勝光院　昔、京都南禪寺の境内にありし寺。後白河天皇の中宮、建春門院平滋子の願に由り、承安三年に建立せられ、岡城寺に屬してゐたが元仁二年兵火のために燒亡して廢絶に歸した。石橋尙寶氏の詳解には山城名勝志をひいて「最勝寺跡、二條通北車道四一町許、横岡と云田字アリ」とあげてあるが、これは鳥羽天皇の御願で出來た六勝寺の一つである最勝寺の位置であらう。最勝光院のことを一名最勝寺ともいふので兩者が混同せられての誤りと思ふ。　○故づきたる女房　よしありげな女房である。いはれのありさうな女房である。　○釣殿　寢殿造りの東西廊の南の端に、池に臨んでゐるところに構へた屋である。水面へ釣り下した樣に造るからこの名があるともいふし、又一說には魚を釣るために設けた故に名づけるともいふ。　○打ちむれて　「打ち」は接頭語。連立つて。　○こちなし　無骨なること、無風流なること。無骨といふ文字は「こちなし」を音讀して漢字をあてたものである。この「なし」は有る無しの無しではなくて、忝なし勿體なし等のなしの樣に、有樣を示す一種の接尾語と考へたいのであるが、「骨」そのものは禮儀作法の意味を持つてゐるので、それを打消す「無」しであらうかと思はれる。「骨」も「こち」も同樣である。　○うすぎぬ　薄いきもの、うすごろものことである。　○事の外に　非常に。甚しくの意。　○すゝけたる　けがれてきたなくなつたの意。煤のために黑くなつた意ではない。　○花を見すてゝかへるさるまろ　さるまろといふのは、うすきたない衣をつけてゐる女房をあざけつて呼んだのである。猿の異名である。まろといふのは、人名の下につける丸、麿と同じで一種の接尾語である。これを猿にも擬人的に使用したものである。全意は花も見ないで猿の樣な女房が歸つてゆくことよと嘲つたのである。　○連歌　別講顯原氏の俳句俳文評釋の一、緒言の條參照。　○里まもるいぬのほゆるに驚きて　前のさるまろの句と合せて一首の和歌になるのである。かく連歌の場合句をよみつゞける事を付けるといふのである。いぬといつたのは、前句の猿に對して言つたのである。犬と猿は仲の惡いものだといふ意などは勿論ないのであらうが、自分を猿にたとへて侮辱したのに對して、男の方を犬に見たてゝ返報したのである。自分がうすぎたない猿ならば、君達は、里の番をしてゐる犬とあまり變りはなからう、きたないものを見て吠えるといふのだからと、嘲つたのを吠えた等言つたのはいかにも手きびしい。　○俊成卿　五條三位といふ。有名なる歌人。後白河法皇の勅により千載樂を撰した。著書に古來風體抄がある。家集を長秋詠藻といふ。安元二年、皇太后宮大夫の官を辭して入道して釋阿と稱し、建仁三年に九十歳で死した。　○姿をやつす　見すぼらしい姿に樣子をかへること。目だたぬやうに姿をかへること。

【通釋】 つい近頃の話である。最勝光院に梅が滿開であつた春のこと、由緒あるらしい女房が一人、釣殿のあたりにたゝずんで花を見てゐた所が、その時、男法師たちが、がや〳〵とうち連だつてそこへやつて來たので、無作法な連中が來たわいと思つたのであらうか、歸り出ようとしたところ、その女房の着てゐる薄い着物が、非常に黃色を帶びてうすきたなくなつてゐるのを見た男法師が、笑ひながら、

花を見すててかへるさるまろ

——猿の奴が花をも見ないで歸つてゆくことよ、あのざまは——

と連歌をしかけましたので、女房はとりあへず

里まもるいぬのほゆるに驚きて

——禮儀知らずの里の番犬に吠えられてびつくりしたからさ——

と付けたものだ。これを聞いて男法師たちは恥かしくて、ゐたゝまれなくなつて、逃げて行つてしまつた。此の女房は藤原俊成卿の娘であつて、非常にすぐれた歌人であつたが、ひどくみすぼらしい姿わざと樣子をかへてゐたのであつた。男法師達はそれを知らずに、あざけつて却つて恥をうけたのである。

【評釋】　禮儀知らずの男法師たちを、物の見事に恥ぢしめた俊成卿の娘の器量もさる事ながら、外觀外見によつて他人をあなどつた物共が、思はぬ恥辱を受けたいましめの意を没まなければならない。「いふまじき言をもいひ、すまじきわざをふるまふ」うちに「思はざるのはぢがましき事にあひ」たる好適例である。「猿まろ」と言はれたのに對して、「里まもる犬」とかへしたところは、拔く手もみせない鮮かな眞向唐竹割である。ゐたゝまれなくなつて逃げ出したのも尤もである。ゆかしい才女の姿がうき出して見えるのは訓誡以外のたまものである。

第三の(三)

昔、漢の高祖と楚の項羽と、秦の世をあらそひし時、あまたの合戰をいたすといへども、高祖つゝがなくて、つひに項羽をほろぼして、天下をとれりしほどに、黥布といふ小臣の、心にそむきたる事ありけるをあなづりて、みづからせめ給ふ程に、ながれ矢にあたりて、失せ給ひにけり。何方につけても、人をばあなづるまじきなり。すべて、賢き人も萬慮に一失あり。愚なるものも千慮に一得あり。此の千が一の得を習ひて、彼の萬が一の失をのがるべし。これによりて、智者は空門を破るともいひ、聖人は鄒亳にはかるともいへり。此の心は、よき人は、人をあなづらずして、あやしのものにも、物を問ひ學ぶ事を恥ぢぬなり。故に黃帝は牧童の詞を信じ、德宗は農夫のいさめをば聞入れ給ひける。かゝれば、街談巷說の中にも、必ずとるべき事ありといへり。

【語釋】　○漢の高祖　秦の始皇帝が死んでから、江東(江蘇省)に起つた楚の遺臣項羽と江蘇省の沛に起つた劉邦とは、兩々相下らす天下をとらうとして爭つた。爾して劉邦は遂に項羽に先つて、秦の根據地である關中即ち今の陝西地方に入つた。時に二世皇帝の趙高のために弑せられ、秦王子嬰も位にあつたが劉邦に降つた。次いで劉邦と項羽との間には更に多くの爭があり、遂に劉邦が最後の勝利を得て、皇帝の位に即き、長安(今の西安)に都した。これが漢の高祖である。　○つゝがなく　無事に障りなく。　○黥布　姓は英氏、楚の將であつたが、楯にそむいて漢に歸したので、漢立てゝ淮南王とした。その後黥布は、高祖が韓信を殺したり、彭越を醢(ししひしほ)(刻んだ乾肉に麹をまぜて美酒にひたしてならした物)にしたりしたのを見て、禍が自分にも及ぶであらうことを恐れて、遂に謀叛した。そこで高祖自ら將として之を擊つたが、遂に流矢にあたつて死んだ。　○萬慮に一失云々　史記の淮陰侯傳に次の樣にある。「廣武君曰、智者千慮、必有二一失一、愚者千慮、必有二一得一、故狂夫之言、聖人擇焉。」萬慮といふのは、多くの思慮、樣々に考慮をめぐらすこと。賢き人にても千慮萬慮の中には稀には失策もあるし、愚なる者でも、千慮の中には、一つ位は得る所もあるといふ意。　○此の千が一の得云々　愚者千慮一得の一得をいふ。萬が一の失は、智者千慮一失の一失である。　○智者は空門を破る　空門は佛語で有門に對す。佛法にて、諸法皆空の理を說く法門をいふ。空有の二門などいひて、一切の萬象は悉く因緣によつて生じたもので、その體、實有でないからこれを空といふ。然れどもこの空も、空無の空ではなくて、實は假有のものであるから、これを有と名づける。佛教ではこれを眞俗二諦といふ。空門を破るといふのは、しか

し、こゝでは、むつかしい形而上的の眞理に囚はれないで、さういふ眞理の殿堂を出でその具體的事象を現實の實際世界に求め、之れに應じてその眞理の實際を行ふ位の意味であらう、即ち智者は決して通俗、平易俗事を馬鹿にはしないといふ事を言つたものと思ふ。　○聖人は芻蕘にはかる　芻蕘といふのは草刈る者と、樵夫のこと。詩經大雅板の章篇に、「先民有レ言、詢二于芻蕘一」と見えてゐる。その註に、「先民、古之賢人也、芻蕘采レ薪者、古人尚詢及二芻蕘一況其僕友乎。」とある。聖人といはれる程の人は、草刈や樵夫にまでも、自分の思ふところをはかり尋ねるといふので、つまらないものを馬鹿にしないことを言つたのである。　○此の心　上述の智者は空門を破るといひ、聖人は芻蕘にはかるといふ語の本義、精神をいふのである。　○黄帝は牧童の詞を信じ　黄帝は古の支那の天子である。姓は軒轅氏。伏羲氏、神農氏と合せて三皇と稱せられてゐる。今の漢族を率ゐて西方から來た酋長であらうといふことである。この黄帝が牧童の詞を信じたといふことは莊子の雜篇徐無鬼に見えてゐる。その原文をあげてみる。「黄帝將レ見二大隗乎具茨之山一。方明爲レ御。昌寓驂乘。張若謵朋前馬。昆閽滑稽後車。至二於襄城之野一。七聖皆迷。無レ所レ問レ途。適遇二牧レ馬童子一。問レ塗焉曰。若知二具茨之山一乎。曰然。若知二大隗之所一乎。曰然。黄帝曰。異哉小童。非二徒知一二具茨之山一、又知二大隗之所一存。請三問爲二天下一。小童曰。夫爲二天下一者亦若レ此而已矣。又奚事焉。……（中略）黄帝曰。夫爲二天下一者。則誠非二吾子事一。雖レ然請三問爲二天下一。小童辭。黄帝又問。小童曰。夫爲二天下一者。亦奚以異二乎牧レ馬者一哉。亦去二其害レ馬者一而已。黄帝再拜稽首。稱二天師一而退。黄帝の樣な人でも牧童の言をまことゝしたのである。　○德宗は農夫のいさめをば聞入れ　十訓抄詳解には「案ずるに德宗とは北條時賴を指すならん。そは時賴の法名を德宗といひ、北條氏の領地を德宗領といへばなり。」と書いて太平記及大日本史が引いてある。試みにその太平記を引用してみると（有朋堂本による）卷第三十五に、北野通夜物語事附青砥左衞門事といふのがあつて、その一節に次の樣にある。「或時德宗領に沙汰出來て、地下の公文と、相模守と訴陣に番事あり。理非懸隔して、公文が申處道理なりけれども、奉行頭人評定衆、皆德宗領に憚つて、公文を負ける、青砥左衞門唯一人、權門にも不恐、理の當る處を具に申立て、遂に相模守をぞ負しける。」こゝに地下の公文といふのは、平人の文書を掌る所の役人であつて、しかし黄帝といふ支那の皇帝への對句としては、時賴では聊かつりあはぬ樣にも思はれる。さにかく石橋氏の說を肯定して置かう。　○街談・巷說　俗人の口にするところの意。　○ありといへり　あるといふことだ。客觀的に記してある。かういふ語で話の終りを結ぶのは、十訓抄の常套法の一つである。

「はぐくむべしとなり」（第一の序文）　「ありきけるとなん」（第一の中）　「竹の枝をさすとかや」（第一の中）
「つけたりけるとかや」（第一の中）　「とこそ聞ゆれ」（第一の中）　「とぞいひけるとかや」（第一の中）
「けると聞えき」（第一の中）　「とぞ人々申し合ひける」（第一の中）　「みてりともこぼさじとなり」（第二の中）
「と人いひけり」（第二の中）　「たりけるとぞ」（第二の中）

從來、抄出した前後の文の、最後のところ一寸見ただけでもこれ位の例がある。これは今昔物語に於て常套的に終末として使はれてゐる。「となむ語りつたへたるとや」の系統をひくものであらうと考へる。今昔物語の系統をひく宇治拾遺物語（十訓抄と同時代に出來たもの）にもこれは用ひられてゐる。かうした說話的のものゝ常型であらう。

【通釋】　昔、支那でのこと、漢の高祖と楚の項羽とが、兩々相爭つて秦の天下をとらうとした時に、多くの合戰を交へたのであつたけれども、遂に高祖が武運目出度く、項羽を亡ぼして天下を我ものとしたのであつた。ところが、さうかうするうちに、黥布といふ小臣が、高祖に楯をついた事があつたので、之を悔どつて、高祖自ら馬を陣頭に立てゝお攻めになつたところが、流矢に當つて高祖は敢ない最後を遂げてしまはれたのであつた。何につけても萬事、人をあなどるといふことはあつてはならないことである。總體、いかなる賢人だと言つても、萬慮の中に

一失がないとは限らないのである。又、反對に、如何なる愚人だと言つても、千慮の中には一得ぐらゐあるものである。だからこの千慮中の一得を自分の身に習ひとつて以つて、彼が萬慮中の一失に陷らない樣にする事が必要である。賢人だとて愚人から習ひ得るものは、たとへ僅少にもせよあるのである。決して、この愚人の千慮中の一得をないがしろにしてはならないのである。だからこそ、智者は空門――高尙ほ哲理にたよることばかりを能としないで、この空門を破つて卑俗の實際についてその眞理の姿を實得しようとするものだといはれてゐる。又聖人は草刈、牧童の樣なものからでも道を習ふものだとも言はれてゐる。此の言の精神は、すぐれた人は、卑賤の者にも、物を尋ね問ひて、以て自己の足らざるを補ふことをなし、敢てこれを恥とはしないのである。故に三皇の一人である黃帝は一牧童に道を兼ねて之を信じ、德宗は農夫のいさめをば聞入れたのである。かういふ譯であるから、道路の言――卑俗の人の口にするところにも、必ずとつて以て道とすべき一理の存するものである。

【評釋】　卑賤のものを侮つてはならないといふことの訓誡である。序文のところに書いてあつた、「貧しくいやしきをも慢り」及び「いやしきものは、ふるまひとふるまふこと、いたづらごとと思へり」等の說に相應ずるものである。高祖があれだけの英主であつて、叛臣の流矢にあたつて不覺の死を遂げたといふのは、同じ序文の中の「あなづるかつらにたはぶれして、思はざるほかのはぢがましき事にもあひ」たる實例である。一々かうして古今の實例をひいての敎訓は空言とちがつて、心耳に入ること又切なるものがあるのである。

第三の(四)

村上天皇、ひそかに賤しきつかさ人の、年老いたるを召して、「延喜の先朝と當世と、いかなるかはりめかある」と問はせ給ひければ、おそれおぼえけるにや、「さらにかはれる事侍らず」と、いみじう畏まりたりければ、おぼしめすむねありて、御たづねあるなり。たゞあらんほどの事、たしかに申すべきよしを、しきりに仰せ下されければ、その時「何事もいとめでたくて、更にそのけぢめ思ひわかず侍るに、當世には、除目をおこなはるゝに、續松のいさゝか入り增るやうにぞおぼえ侍る」と申したりければ、いみじう御感あり。さて司召の事をば、兼ねてよくおぼしめし定められけり。

【語釋】　○村上天皇　第六十二代の天皇、醍醐天皇の第十四皇子。延長九年御即位。天曆八年、大內記菅原文時に勅じ、封事を來り政治の得失を論ぜしめられた。天皇ははは資性明敏、文事に志あると共に、又政治にも心を委ねられ、賑恤を以て急務とせられた。天皇の治世は能く治つたといふので天曆の治といつて醍醐天皇の延喜の治に比してゐる。（しかし歷史上には又別の議論もあるやうである。）　○つかさ人　官職にある人、役人、のことである。こゝは朝廷に仕へてゐる役人である。　○延喜の先朝　前述の醍醐天皇の治世である。醍醐天皇は宇多天皇の長子。寬平九年御即位。延喜五年紀貫之に勅して古今和歌集を撰ぼしめられ、ついで時平等に命じて格式を編せしめられた。天皇は聰明、勵精治をはかり、百姓を哀れみ給ひ、寒夜御衣を脫して民間の凍餒を察せられしは有名なる話である。畿外の地は國司に失政多く、武門漸く興らんとする萌を生じ、騷亂諸國に起つたのであるが、京畿は無事大平であつた。世に延喜の治といつてゐる。　○おそれおぼえけるにや　天皇の御下問に接して恐縮したものであらうか。　○いみじう　ひどく、甚だしくの意。　○長まりたり　恐懼したこと。　○たゞあらんほどのこと云々　別にむつかしい答を要求するのではない、たゞありのまゝの事を言へばよいといふ意。　○けぢめ　區別である。差別である。延喜の御

代と當代との政治上の差別をさす。　○除目　除は官に拜する義、官は目錄のこと。官に除し目錄に記す義である。大臣以外の諸臣を任官する式をいふのである。縣召除目、京官除目、臨時除目、宮司除目、坊間除目、蔵官除目、女官除目などいろ〳〵ある。　○續松　松明のこと。松の脂の多い部分、又、竹葦などを束ねて火をともし、路を照すに用ひるものである。これの多くいると云ふのは、除目が行はれるために、夜が更けることが多いからである。　○司召の事　司召除目のことである。在京諸司を任補する儀式で、京官除目とも秋除目ともいふ。縣召除目と大差はない。一夜又は二夜に行ふ時がある。　○兼ねて前以てあらかじめ。　○よくおぼしめし定められけり　在京諸司の任官についてはあらかじめ、深く御注意になつて、政事の煩をさけようとなさつたのである。

【通釋】　村上天皇がある時、そつと身分の低い朝廷の年よつた官人を御召しよせになつて、「先帝延喜の御代と當代とは、政治上どういふちがつた點があるか、いつて見よ。」と臣下をして御たづねになりましたところ、その老人恐れ入つたものと見えて「一向どこも變つたところは無いと存じます」と言つて、ひどく恐縮してしまつた。天皇はこれを御きゝになつて、更に臣下を通じて「所存があつて尋ねるのだ。たゞ作りかざりのないありのまゝのことを、はつきりと言つたらよいのだ。」としきりに仰つしやいますので、老人がその時申しました。「當代の御政治は何事もよく行き屆いて結構で御座いまして、先代との間には一向そのちがつた點も氣付かないので御座いますが、唯當代には、任官の御儀式が行はれます時に、御つかひになります松明が、多少先代よりも多くいる樣に思ひますだけで御座います。」これを耳にせられた天皇は、なるほどとひどく感じ入られて、その以後京官の除目については、あらかじめ深く御注意を御加へになつた事であつた。

【評釋】　この事は古今著聞集卷三政道忠臣のところに出てゐる。

「村上の御時、南殿に出御ありけるに、諸司の下部の年たけたるが、南階の邊に候ひけるを召して『當時の政道をば世にいかゞ申す』と御尋ありければ「めでたく候ふとこそ申し候へ。但主殿寮に松明多く入り候ふ、率分堂に草候ふ」と奏したりければ、帝大に恥ぢ思召してげり。させる公事の日にはあらざりけるにや。松明の入ると申すは、公事の夜に入るよしにて侍り。率分堂に草のしげるとは、諸國の貢物の參らぬよしなるべし。いみじく申したりけるものなり。」（有朋堂文庫による）

聖主がいやしいものゝ言ふ事を御用ひになつて、御政道を反省された例話であつて、誰のいふ事でも侮るまじきといふ訓誡である。人口に膾炙した話である。

第四　可レ誡三人上多言等一事

或人いはく、人は慮なく、いふまじき事を口とくいひ出だし、人の短きをそしり、したることを難じ、かくすことを類はし、恥がましきことをたゞす。これらは、すべてあるまじきわざなり。我は何となくいひちらして、思ひ入れぬほどに、いはるゝ人は、おもひつめて、いきどほり深くなりぬれば、はからざるに、恥をもあたへられ、身の果つるほどの大事にも及ぶなり。ゑみの中の劍は、さらでだにも恐るべき物ぞかし。又よくも心得ぬ事を、あしさまに難じつれば、却りて身の不覺あらはるゝものなり。　大方口かろきものになりぬれば、「某に其の事な聞かせそ。彼の者にな見せそ。」などいひて、人に心をおかれへだてらるゝ、口をしかるべし。又人のつゝむ事の、おのづからもれ聞えたるにつけても、かれはなされしなどうたがはれんは、面目な

かるべし。しかれば、かたゞ〳〵人のうへをつゝしみ、多言を止むべきなり。

【語釋】 ○或人いはく　この語は十訓抄十訓の序文の各冒頭に用ひられた語である。この語で始まらない序文は十訓の内一つもない。しかもこの語の繫るところは何處かと探してみるのに、多くそのかゝる所を明かにしない。即ち或人の言つた言葉は何處までなのだかはつきり分らない。（つまりこの語は一種の常套的形式語で、十訓抄編者が、或人の言に託して教訓の本旨を述べようと裝つたので、序文全體が決して或人の言ではないのである。併しもしその語の繫るところを明かにせよとならば、序文全體にかゝるものだと、私は以上の見地から說かざるを得ないのである。　○人は　この「人は」は下の「口とくいひ出だし」「そしり」「難じ」「顯はし」「たゞす」を以て受けられてゐる語である。人は一體によくさういふことをし易いものだと、その缺點をあげたのである。○慮　思慮分別のこと。「慮なく」は副詞的修飾語で、下の「口とくいひ出だし」以下を修飾してゐる。即ち思慮分別もなしに以下のことをやる缺點があるといふのである。　○いふまじき事　「まじき」は助動詞「まじ」の連體形。「まじ」は推量して打消す意味を表はす助動詞。いふべからざる事より多少意味を輕く考へてよい。課する時必ずしも推量の意味を表に出す必要はない。　○口とくいひ出だし　はや口にしやべるといふのではない。言つてはならない事であるから、つゝしんで口にしてはならないのであるが、その慣を破つて輕卒に口にすることをいふのである。　○短き　短所である。缺點である。文法上の形では「短し」といふ久活用の形容詞の連體形である。連體形は往々下に體言を伴ふことなくしてそのまゝで體言として用ひられる事がある。こゝはその例である。　○したる事　他人の爲したことである。　○顯はし　公にすること。明るみへ出すこと。　○恥がましきことをたゞす　ただすは尋ねきはむ、糾明する意味。さういふ事をされては、された方が大きな恥辱をさらさなければならぬ樣なことでも糾はずやる（糾明する）のである。　○これら云々　上の「いふまじき事を口とくいひ出だし……恥がましきことをたゞす。」を全部受ける。人間は何の分別もなしにかういふ事をやつてのけるものだが、それはすべてあるまじき事だといふのである。　○我は　いひちらす方ではの意。　○何となくいひちらして　深い考へもなしに、何とはなしに、極めて輕い意味でいひちらすのである。「いひちらす」とは妄りにいふことである。　○思ひも入れぬほどに　大した問題ともして居らないうちにの意。「ぬ」は打消の助動詞「ず」の連體形。　○おもひつめて云々　ひたすらに思ひこんで、言はれた事ばかりを氣にして、憤怒の心がます〳〵つのつて行つてしまふと。思ひこんでゐるうちにだん〳〵腹立がひどくなつて行くのである。　○はからざるに　思ひがけなくもの意。何となく言ひちらした人の方にとつて思ひがけなくもである。何故ならばその人は、「思ひも入れぬほどに」であつたのだから。　○恥をもあたへられ　言はれた人が（言ふ人からいへば恥辱を與へるつもりではなかつたらうが）恥辱を受けるのである。○身の果つるほどの大事　いはれた人が自分の一身を亡ぼして了はなければならない樣な大事に至ることがあるのである。「身の果つる」といふのは、生命を失ふと解いてもよいし、また人の中に顏の出せない樣な體面上の恥辱不面目をさしてもよいのである。　○ゑみの中の劍　ゑみの中の刀ともいふ諺である。外貌は柔和で、内に害心を抱いてゐるのに譬へて言ふ。「錦に針を包む。」「口に蜜あり腹に劍あり。」等いふも同じである。唐書の李義府傳に次の樣に出てゐる。「李義府貌柔恭、與人言、嬉怡微笑、而陰賊褊忌著二于心一、凡忤レ意者、皆中二傷之一、時號二義府笑中刀一。」この諺をこゝに引用した意味は、あまり適確でない樣であるが、自分が何とも思つてゐないで言つた事が原因になつて、不慮の災害を及ぼすことになるのをたとへて言つたものであらうと思ふ。　○さらでだにも　他人の事を言ひふらすといふ樣な缺點が自分にある場合でなくても、人は笑ひの中に往々人を害する劍を藏してゐるものだから注意を要するといふのである。　○よくも心得ぬ事　自分がよくその事情などを知らない事をいふのである。　○あしざま　よからぬ樣に、惡い樣にの意。　○身の不覺　あしざまに言つた方の人の及ばぬ點をいふ。　○口かろきものになりぬれば　あの人間は大體口の輕いおしやべりであるといふことに相場がきまつてし

まふといふと。　○某に其の事な聞かせそ　あの人にその事を話してはいけない。「な」は「そ」と共に、間に動詞の連用形（加行變格活用及び佐行變格活用の動詞は未然形）をはさんで、動作を禁止する語。「な」も「そ」も共に助詞。文法家によつては「な」を副詞とする人、又助動詞とする人がある。こゝでは從はない。別講「文法及び口語法」助詞の條下參照。　○人に心をおかれへだてらるゝ　他人から打解けられない、（氣兼される、遠慮される）で、疎隔されること。　○口をしかるべし　殘念であらう。不本意であらう。　○人のつゝむ事のおのづからもれ聞えたる　他が秘密にしてゐた事が、自然外部にもれ現はる事。　○かれはなされし　あの人がしやべつたのである。「し」は過去の助動詞「き」の連體形である。　○かたくゝ　どのみち、いづれにしても の意。第一に「人に心をおかれへだてらるゝ、口をしかるべし。」をうけ第二に「疑はれては面目なかるべし。」をうけるいづれにしても多言の招く罪であるから、どのみち多言はしない樣に注意すべきである。　○人のうへをつゝしむ　他人に關係のある事に就いて言葉を挿まぬ樣に氣をつけることである。

【通釋】　これは或人が言つたいましめである。總體人間といふものは何の思慮分別も無しにつひ、口にしてはならない事を、輕卒にもしやべつたり、他人の短所をとやかくそしつてみたり、人のする事なすことを批難したり、又人の秘密にしてゐることを表向に人前で口外したり、或はその人の恥辱になるやうなことを根ほり葉ほり糺明したりなどし勝ちのものである。しかしこれ等のことはどれと言つてすべてしてはならない事である。これを口にする方では別段何の意味もなしに妄りに饒舌りちらしたので、特別問題ともして居らないのであるが、妄りに言ひ散らされた方側では、その事ばかりを氣に留めて、やがて憤怒の焰がだん〳〵と燃えまさつて來ると言ふと、思ひかけなくも、とんだ恥辱を受けなければならない目に合つて、やがて自己の一身を破滅におとしいれるといふ樣な大事にも至るものである。「ゑみの中の劍」とはよく人の言ふことであるが、自分の意にもかけてゐないことから、とんでもない恐ろしい災害を人に及ぼしてやがて、人の身を毒するといふことがあるものだ。自分が他人の惡口をロにした樣な場合でなくてさへ、笑の中の劍といふ事があるんだから、況して口の過ぎた樣な時にはよく注意をしなければならない。

又自分でよくその事情の分つてをらない樣な事柄を、よからぬ樣に批難するといふと、却つてそのために、他人の惡をとがめる筈であつたのに、口にした自分の方の缺點を暴露するといふ樣なことがあるものである。すべての人は口の輕いよく饒舌る奴だといふことに相場が一旦極つてしまふといふと、

「あの男にはその事を聞かしてはならない。かの人にはそれを見せてはならない。すぐ世間に知れてしまふから。」

たどと言つて、世の人から敬遠され、離隔されて、親しく口もきいて貰はれなくなつて了ふ。このことはまことに殘念な事である。又、他人の秘密にしてゐる事が、他の事情によつて自然世の中に公になつたといふ樣な場合でも、

「これはきつとあの人が世間に秘密をもらしたにちがひない。」

などと、あらぬ疑ひを蒙る樣なことになる。これも實に不面目此上もない事であらう。

以上二つの點（殘念な事である、不面目此上もない事である。）から考へて見て、いづれにしても他人の身上に就いてとやかくと噂をしたり、つまらぬ批難を加へたりすることは、よく〳〵注意して差しひかへ、多言を避けるやうの修養が何より大切である。

【評釋】　これは十訓抄第四訓の「可レ誡ニ人上多言等ノ事」の序文である。他人の身に關係のある事に就いてとやかく饒舌りちらす事はつゝしまなければならないといふのである。

この序文は、通釋で段落を切つておいた樣に、眞中のところで二分されるのである。即ち前半は「ゑみの中の劍は、さらでだにも恐るべき物ぞかし。」で終るのである。而して他人の身上に關して實際多言をした場合のことを言ひ、且つ本人の自覺以上の恐ろしい災害を招來することがあると注意を促したのである。後半は、一旦饒舌家といふ評判を得てしまふと、自分が洩らしたのでも無い場合でも、その罪を負はされ、遂に他人からは離隔され不面目を荷ふことになる。だから吳々も多言をつゝしむべしといふのである。

諺にも「駟も舌に及ばず。」といふのがある。一旦言ひ出して過あつたとすれば四頭の馬で以て追つたとても追ひつなかいのである。慎むべきは言語である。

第四の(一)

行基菩薩、菅原寺の東南院にして、終を取りたまひけるとき、弟子どもに敎へいましめていはく、「口の虎は身を破り、舌の劍は命をたつ。口をして鼻のごとくにすれば、後あやまつ事なし。虎は死して皮をのこし、人は死して名をのこす。」これを書きとゞめて、彼の遺言と名づけて、今に傳へたり。さてそのとき讀み給へる歌、

法の月久しくもがなとおもへどもさよ更けぬらし光かくしつ

かくて身心安樂にして、終り給ひにけり。」朝野僉載にいはく、「人死留レ名、虎死留レ皮。」又いはく、「口是禍之門也、舌是禍之根也。」養生經にいはく、「使二口如レ鼻、終レ身勿レ事。」などいへる文を思はへて、かやうにのたまへるにや。又老子傳には、「多言害レ身、多事害レ神。」とも見えたれば、よく〳〵つゝしみいましむべし。又人の寄合ひて、打ちさゝやきなどせん所へは、始めより交り居らざらんには、よるべからず。おのづからあしく行合ひたりとも、さらぬやうにて立ちのくべし。これ文のをしへなり。

〔語釋〕 ○行基菩薩　俗は高志氏、百濟國王の胤。和泉大鳥郡の人、天智天皇七年に生れ、十五歳で出家し、藥師寺に居つた。瑜伽唯識等の論を新羅の隷基に學び、又義淵に從つても學んだ。常に行化を事とし、過ぐる所隣難に遇へば、橋を架け路を修繕し、又耕墾すべき土地あれば之を敎へ、灌漑貯水の法を示し、堤池を穿ち、堤塘を築くといふありさまであつた。人民は後世に至るまで之に賴つた。王議の內寺を建てたもの四十九。聖武天皇の敬重を受け、天平十七年大僧正になつた。大僧正任官のはじめである。二十一年正月、皇帝菩薩戒を受けたまひ、行基に大菩薩の號を賜はつた。二月二日、菅原寺東南院に寂滅した。年八十二歳。(國史大辭典に據る)菩薩は梵語の(Bodhi-sattva)菩提薩埵の略。大覺有情と譯す。佛につぐ位置であつて、勇猛心を以て菩提を求め、大慈悲を以て衆生を救ひ、既に妙覺の果に近づいた人を指すのである。行基が聖武天皇より賜はつたのは尊號の一つで、朝廷から頌德の高僧に賜はるものである。　○菅原寺　大和國添下郡(今の生駒郡)都跡村菅原にあつて喜光寺ともいふ。西大寺の南八町、奈良より約西方一里五町。靈龜元年僧行基の創建したもので畿內四十九院の一つであらうといふ。聖武天皇嘗つて行幸し給ふや、阿彌陀忽ち光を發したので喜光寺の號を賜つたといふ。今は荒廢して僅に堂宇を存するだけである。本堂は室町時代の建築で特別保護建造物である。東南院は當時の寺中であつたのであらう。　○終を取りたまひける時　入寂した時の意である。「行基年譜」に天平二十一年二月二日、於二菅原寺東南院一、右脇而臥、身心安穩云々、又誡二諸弟子一云、口虎破レ身、舌劍斷レ命、使二口如レ鼻、死後無レ過、又云、過守如レ鼻命レ成、虎死皮遺、人死名有、汝等努、即和歌云、『借染のやど由女

加留奈今更に物な念そ佛ともなれ』即日中夜入滅云々、行年八十二歳」とあつて、本書にある「法の月」の歌は載つてゐない。○口の虎は身を破り　虎は猛獣で人畜を害するものであるから、それを以て多言の身に災することにたとへて言つたのである。釋氏要覽に「報恩經云、禍從レ口生、口舌者、鑿レ身之斧也」とある。　○舌の劍は命をたつ　口の虎云々に同じ。劍は人命を絶つものであるが、多言また人命に災禍を及ぼすこと劍に同じとたとへて言つたのである。老子の註に「夫舌禍福之門」とある。　○口をして鼻のごとくにすれば云々　鼻は默して語らざるものであるから、口も鼻にならへば多言多舌の禍を免れることが出來るといふのである。同じ顏面にあつて、しかも相近きものを以て譬へたところ寸鐵人を刺すの概がある。九條殿遺誡（藤原師輔の遺誡及び日中の行事を記したもの、一卷）に「古人云、使二口如レ鼻、此之謂也」とある。又童子教にも「使レ口如レ鼻者、終身敢無レ事」とあり、說苑にも「使レ口如レ鼻、終身不レ失」とある。みな多言のいましめである。　○虎は死して皮をのこし、人は死して名をのこす　死後に名譽功績をのこすことを、虎が死んで皮をのこすに譬へ、徒死せざらんやうにいましめたのである。五代史三十二に「王彥章武人、不レ知レ書、常爲二俚語一謂レ人曰、豹死皮レ留、人死留レ名」とある。　○遺言（ゆゐごん）　死後にものをいひのこすこと。遺骸、遺形、遺骨、いづれも「ゆゐ」とよむ。遺の漢音も吳音も「ゐ」である。「ゆゐ」は別の音と見える。　○法の月云々の歌　新勅撰和歌集卷第十、釋教歌の部に、「伊駒の山の麓にてをはりとり侍りけるに大僧正行基」と詞書して「法の月ひさしくもがなと思へどもさ夜更けにけり光かくしつ」と出てゐる。「法の月」といふのは、佛法が世人の迷闇を救ふのを、月が闇夜を照すのにたとへて言ふ。「のりのともしび」といふのも同樣である。佛德のかゞやきが永久に照らしてくれゝばよいと思つてゐるが、夜が更けたためであらうか、その光がかくれてしまつた。　佛德に養はるゝ自分の身も、この世にいますこし長らへたいとは思ふけれども、人生の長夜もふけたのであらうか、みまからなければならない。　○身心安樂　肉體も精身も平和に安穩にある狀態である。臨終正念と言つて、人は息をひきとるときに正しい態度でなければならないのである。　○朝野僉載（てうやせんさい）　唐の張鷟（ザク）の著はした書。　○口是禍之門也云々　「事文類聚後集」十九、馮道詩曰、口是禍之門、舌是斬レ身刀、閉レ口深藏レ舌、安身處々牢。「法苑珠林」の贅匙篇、世尊偈曰、人心是毒根、口爲二禍之門一、心念而口言、身受二其殃殃一、「家語」多言多敗、多事多患。　○養生經　唐書の藝文志に、「上官翼の著はす所、一卷」とあるが、本文は前にあげた孝經の文によつたものであらう。○思はへて　「思はふ」は下二段活用の他動詞である。思はるといふ意味。「思ふ」が「思はふ」と延びたといふ說がある。こゝではお思ひになつてといふ敬語の意味を含めて解くべきであらう。○かやうに　上述本文の行基菩薩が臨終の時弟子共にいましめて言はれた言葉をさす。○孝子傳には　「史記」の列傳に曰く「老子者楚苦縣厲鄉曲仁里人也、姓李氏、名耳、字伯陽、謚曰レ聃、周之守藏室之史也」、書を著はし道德の意を述べた。すべて五千餘言。「老子」といふのがこれである。又「道德經」ともいふ。本文引用の「多言害レ身、多事害レ身」は、この「老子」第五章の河上公の註に出てゐる句である。多く饒舌るといふことは、その身を害する基であるし、多く事をやりすぎるといふことは、その精神をそこなふ所以であるといふ意味である。「老子傳」の「傳」の字は衍字であらうといふことである。　○人の寄合ひて云々　「九條殿遺誡」には次の樣に出てゐる。「凡爲レ人、營致二恭敬之儀一、勿レ生二慢逸之心一、交レ衆之間、用二其心一也、或有レ爲二公家及王卿一、雖レ非二殊諂一、而有レ言二不レ善事一之輩、如レ然之間、必避レ座而却去、若無レ便レ避レ座、守レ口隔レ心、勿レ預二其事一云々」これによつて本文を書いたものであらうといふことである。人が多く集つて、何かひそ〳〵話でもしてゐるやうな所へは、始めから一座をしてゐたのならばとにかく、中途から加はるといふやうなことは絶對に避けなければならぬ。「よる」は寄合へる一座に加はることである。　○おのづからあしく行合ひたりとも云々　自ら求めて行つたのではないが、自然さうした席に連らざるを得ない場合であつても、何とか口實を設けて、そしらぬ態でその座を外すがよい。　○文のをしへ文といふのは何の文とはつきりさすのではない。教へを書いたものを一般的に指して言つたものである。

【通釋】　行基菩薩が、大和の菅原寺の東南院で、まさに息をひきとらうとなさつた時、弟子達に訓誡を與へて言は

れるには、

「多言の身に災害を及ぼすことたとへば猛虎の樣であり、多舌の人身に危害を及ぼし、一命を脅かすことたとへば劍の樣であつて、まことに恐ろしい。口を動かすことを愼しんで、鼻の樣に沈默ならしめたならば、後に起る災害といふものは無い譯である。虎は死んで皮をのこす、況んや人は死後美名を殘さなければならない。それがためにはどうしても、饒舌多言をつゝしまなければならない。」

と、弟子はこれを書きとゞめて、行基菩薩の遺言と稱して今日にも傳へてゐる。さて又その時よまれた歌はかうである。

法の月久しくもがなとおもへどもさよ更けぬらし光かくしつ

かくの如く訓誡を垂れ、辭世を詠じ、身心まことにやすらかに、入寂せられたのであつた。思ふに行基菩薩のこの遺言は、「朝野僉載」に書かれてゐる「人は死んで名を留め、虎は死んで皮を留める。」の語や、又同じ書の「口は災禍の入口であり、舌は災禍の根本原因である。」といふ句や、更に又「養生經」に記されてゐる「口を持するに鼻の如くにしたならば、生涯安全の道をたどる事が出來る。一身の危險は常に口舌の災から來るのである。」などの文を下に御考へになつて、かく言ひのこされたものであらうか。又老子傳には、「多くしやべるのは一身をそこなふ事であり、多くの事を一時になすのは精神をやぶる所以である。」とも書いてあるから、よく〳〵この多言多舌に就いてはつゝしまなければならないのである。又、多くの人が寄り集つて、何かさゝやき話――どうせ他人の惡口を言ひ合つてゐる位が關の山であるが――をしてゐるやうな席へは、始めから一座をしてゐないのであつたならば、わざ〳〵加はる樣なことは絶對禁物である。又さうした席へ、わざ〳〵行つたのではなく、自然そんな席に一座しなければならないやうな破目になつたとしも、何か口實を設けて、そ知らぬ態でそんな席を離れたがよい。これは守らなければならない大切の敎へである。

【評釋】　この段は口の災のひき起した實例談をあげたのではない。序說にあげた總括的の訓誡に類した行基菩薩の語や、朝野僉載、養生經、老子等に見える言葉をあげて、更に序說の意味を強めたものである。

第四の(二)

天暦の御時、月次の御屏風の歌に、擣衣の所に、兼盛詠じていはく、

秋ふかみ雲ゐの雁の聲すなり衣うつべきときやきぬらん

紀文時、件の色紙形を書くとき、筆を抑へていはく、「衣を打つを見て、うつべき時やきぬらんと詠ずる如何。」兼盛に尋ねらるゝに、申していはく、

「あふさかの關のしみづに影見えて今やひくらん望月の駒

と詠ずる、此の難ありや如何。」時文口を閉づ。しかも時文は貫之が子にて、かく難じたりける、いよ〳〵淺かりけり。

【語釋】　○天暦の御時　天暦は皇紀一六〇七年から一六一六年までの年號。村上天皇の御時に當る。　○月次の御屏風　月次は

月ごとにある意味で、毎月あることをさす。月次の繪をかいた屏風が月次の御屏風である。即ち十二ケ月に繪がかき分けてあるのである。　○擣衣　衣板の略、晒布を載せて打ちやはらげるための木又は石の臺。又それをうつことをもいふ。こゝは後の意。歌では九月に當る。　○兼盛　歌人、三十六歌仙の一人。篤行王の第三子。天慶九年臣籍に入つた。村上天皇に仕へて從五位上駿河守にまで進んだ。正暦元年卒した。歌人赤染衛門は兼盛の女である。　○秋ふかみ雲ゐの雁の歌　「秋ふかみ」、は秋が深いので、秋も更けた故にの意。「雲ゐ」は、雲のあるところ即ち大空をいふ。「なり」は指定の助動詞で詠歌の意味に用ひられたもの。動詞の終止形に連續する。「す」は佐行變格の動詞の終止形である。一首の意は、秋もだん〳〵深くなつたので、大空には飛びゆく雁のこゑが聞えて來る事よ。きぬたを打つべき時が來たのであらう、といふのである。　○紀時文　歌人で、貫之の子である。能書家であつた。大膳大夫、内藏助になつた。後拾遺集、續後撰集、續古今集の作家。永觀頃の人である。　○伴の「くだん」は「くだり」の音便である。前に述べた物事をさしていふ。　○色紙形　屏風障子などに、色紙の形を畫きて、彩色などを施し、それに詩歌などを書くものをいふ。その詩歌は屏風や障子にゑがかれてゐる畫の意をよめるものである。こゝはさきに平兼盛のよんだ「秋ふかみ云々」の歌を、能書家に書かせるのである。　○筆を抑へて　書きかけた手をしばし止めての意である。　○衣を打つを見て云々　事實に衣を打つのを見てよんだ歌であるのに、衣を打つべき時が來たのであらうかと、まだ打つてゐない樣に詠むだのはをかしいではないか、どうだと言つて、時文が兼盛を詰つたのである。　○兼盛に尋ねらるゝに「らるゝ」は受身の助動詞より敬語の助動詞に轉じたものである。「らる」の連體形である。紀時文に對する尊敬を表はしたのである。　○申していはく　兼盛が申していはくである。　○あふさかの關のしみづ　拾遺集卷第三秋の部に「延喜の御時の月次の御屏風に」と詞書して貫之の歌として出てゐる。貫之集には八月こまむかへといふ詞が加へてある。「あふさかの」近江國滋賀郡にある逢阪山。今の逢阪の坂路の西北に彎ゆるもの、古逢阪の關のあつたところ。その近くの清水町に「關の清水」といふ清水があつた。　○「望月の駒」　毎年八月に信濃國望月の牧場から、駒をひいて禁中に參らすることがあつた。「駒牽」といつて諸國の牧場から貢進する御馬を天皇の御覽になる儀式があつた。毎年八月に行はれるもので、十六日に信濃國勅旨牧の馬十六疋を牽る。十七日には甲斐國穗坂の牧馬、二十日は武藏國小野の牧馬四十疋、その他秩父の馬二十疋、立野の馬十五疋を牽る。二十三日には信濃望月の馬二十疋、二十八日には上野の馬五十疋を牽かれる。またその駒を逢關の關まで官人が迎へに行くといふ儀があつた。八月の十五日から二十日頃までの間に左馬寮の使が行つたものである。これを「駒迎」と言つた。一說に望月の駒といふのは「三代實錄」に「今年信濃駒牽爲十五日」とあるので、この十五日から來た名稱であらうかといふ說もある。しかし普通は前說が行はれてゐる。　○歌の意　逢阪の關のしみづに影をうつしながら今や牽いてゆくのは、信濃望月の貢馬であらう。望月といつたので月が清水に影をうつしてゐるのを寄せて詠んだのである。藤原公任卿が「させるふしもなくなひらかにいひくたせり」と批評した歌である。拾遺集ではこの歌の前に大貳高遠の「少將に侍りける時駒迎にまかりて」と詞書して、

逢阪のせきのいはかどふみならし山立ち出づるきりはらの駒

といふ歌が出てゐる。　○此の難ありや　兼盛が時文に反問したのである。逢阪の關の清水に現在影をうつしながら駒が牽かれてゆくのであるが、歌では「ひくらん」と推量の形が使つてある。衣を打つのを見てよんだ前の歌が、「來ぬらん」と推量を使つてゐるのと、全く同樣ではないかと一本まゐつたのである。時文は理につまつて口を閉ぢて默つてしまつたのである。○しかもそればかりでなく、その上にもの意。即ち、理に詰る樣なことを言つたそれ自身がまづかつたばかりでなく、時文は貫之ともあちう人の子でありながら、そんなことを言つて批難したので淺いと言はれたのである。だから下に「いよ〳〵淺かりけり」と結んであるのである。「いよ〳〵」はその上にもます〳〵の意である。　○貫之　有名なる歌人、又書にも長ず、紀望行の子、御書所預、大内記、土佐守、玄蕃頭、木工權頭に歷任し、天慶九年卒す。嘗て勅を奉じ、紀友則、凡河内躬恒、壬生忠岑と共に古今和

歌集を撰してその序を作つた。貫之の詠にして集中に入るもの實に一百首。その他後撰集、拾遺集、新古今集、新勅撰集、續後撰集、續古今集、玉葉集、續千載集、續後拾遺集、風雅集、新千載集、新拾遺集、新續古今集にその歌を撰せられてゐる歌仙である。

【通釋】　村上天皇の御時、月次の御屏風の歌に、擣衣の繪に題して兼盛が一首よんだ。それは、

秋も深くなつたので大空には雁のこゑがしてゐるわい、衣うつべき時が來たのであらうか

といふ意味の歌であつた。紀時文が、この歌を例の色紙形に書く時に、手に持つた筆をしばしとゞめて、「實際衣を擣つてゐるのを見てゐながら、打つべき時が來たのであらうか等と、推量を含んだ歌を詠まれるのはどういふ譯であるか。」と兼盛に詰問したものである。その時兼盛が答へていふのには、「例の拾遺集にのつてゐる貫之の歌、

あふさかの關のしみづに影見えて今やひくらん望月の駒

はどうか。これには關のしみづに實際影を寫してをりながら、今やひくらんと推量の意味を含めてゐるではないか。これにもあなたは同樣の批難を加へようとなさるのか、どうか。」と。之を聞いた時文はかへす言葉もなく默してしまつた。たゞの人ならばとにかく、時文は實に和歌の祖宗といはれた貫之の子でありながら、こんな拙いことを言つたのであるから、ますます思慮淺薄といはなければならない。他人の批難は決して輕々しくすべきものではない。尤も時文は立派な歌人であるから、よくも心得ぬ事を、あしざまに難じつれば、却りて身の不覺あらはるゝものなり。」に當る。を表はしたには相違ないのである。

この話は藤原清輔の著「袋草紙」卷三に出てゐる。（「袋草紙」といふのは四册あつて、和歌會の作法から、諸式の故實、六帖歌數の事、歌詞の難解等を註し、當時の雜談故事等を載せたものである。）參考のためにその原文を引用してみる。（歌學文庫三によつて）

其時御屏風歌擣衣所に兼盛詠

ころもうつべきときやきぬらむ（書入云上句アキフカミクモサノカリノコエスナリ）

紀時文件色紙形を書之時抑レ筆て云見在に擣衣をみて衣可打時やきぬらむと詠レ之條如何仍被レ問ニ兼盛一之所申云貫之延喜御時御屏風駒迎所にいまやひくらむもち月のこまと（書入云上句あふさかのせきの清水にかけみえて）詠有ニ此難一歟如何時文閉口云々。

なほ「古今著聞集」卷第五、和歌の部にも出てゐる。文は殆ど同じである。すなはち

天曆の御時月次御屏風の歌に、擣衣の所に、兼盛詠じていはく、

秋ふかみくもゐの雁のこゑすなり衣うつべきときや來ぬらん

紀時文、件の色紙形をかく時、筆をおさへていはく、「衣うつを見て、うつべき時やきぬらんと詠ずるいかゞ」兼盛にやがてたづねらるゝ所に、申していはく「貫之が延喜の御時、同御屏風に駒迎の所に、

逢坂の關の清水にかげ見えていまやひくらんもちづきのこま

と詠ず、この難ありやいかゞ」時文口を閉づ。しかも時文は貫之が子にて、かくなん誹りける。いよ〳〵淺かりけり。

以て十訓抄の據つたところがうかゞはれる樣に思ふ。

第四の(三)

花園大臣の御許に、始めて參りたる侍の、名簿のはし書に、「能は歌よみ」と書きたりけり。秋の初に南殿に出でてはたおりのなくを愛しておはしましけるに、暮れければ、「下格子に人參れ」と仰せられける。「藏人五位たがひて、人も候はぬ。」と申して、此の侍の參りたるを、「たゞおのれおろせ。」とありければ、まゐりたるに、「汝は歌よみとな。」とありければ、畏まりて格子おろしさして候ふに、「此のはたおりをば聞くや。一首つかうまつれ。」と仰せければ、「青柳の」と五文字をいだしたるを、候ひける女房たち、折にあはずと思ひたりげにて、わらひ出でたりけるを、「物を聞きはてで、わらふやうやはある」と仰せられて、「とく仕うまつれ。」と仰せられければ、

青柳のみどりの絲をくりかへし夏へて秋ぞはた織はなく

とよみたりければ、萩おりたる御直垂をおし出だして、賜はせてけり。

【語釋】 ○花園大臣　花園左大臣源有仁のこと。輔仁親王の子。白河帝の皇孫。姓源をたまはり、左大臣に進み、文安三年薨去。年四十五。 ○名簿　古昔、他に歸服し、又は師として入門する時など證として送るもの、官位・姓名・年月日などを記す。異本には「名簿のはし書」とはなくて「名簿に」とあるさうである。 ○能は歌よみ　自分の出來ると思ふことを能といふ。侍が歌だけはよめると自信を持つて言つた所が見える。 ○南殿　こゝは紫宸殿のことではなくて左大臣家の殿殿をさしたものと思ふ。 ○はたおり　虫の名。きりぎりす(螽斯)のこと。 ○下格子　格下をおろすこと。格子といふのは、細い角木を縱横四つ目に組んで作つた戸。古へ殿殿等の四方を蔽つたもので、柱と柱との間ごとにあつて、上に一枚を釣り下げ下に一枚を立て、掛金にて掛け留めておく。晝はこれを上につりあげておくが、暮れゝば下につりおろすのである。 ○藏人五位　六位の藏人であつて禁中の藏人所に仕へてゐたもの。六位の藏人は宮中の些細の公事を勤め、朝夕の御膳の給仕などを勤めるのである。 ○たがひて　丁度その場に居合はさなかつたのである。 ○候はぬ　侍候して居らない。「候ふ」は動詞。「ぬ」は打消の助動詞。「ず」の連體形。終止形で結ぶべきを「候はぬ事よ」の略として使つたものと思はれる。 ○たゞおのれおろせ　すぐお前が下せの意。 ○まゐりたるに　參上したのではない。(參上した意味の參るは、すぐ前に「此の侍の參りたるを」といふ所に使つてある。格下を下しまゐらせたのである。 ○汝は歌よみとな　御前は歌よみだといふんだな。極めて輕い疑の意をふくませて念を押して言はれた言葉。 ○おろしさして　格子をすつかり下してしまはないで。 ○折にあはず　秋の初に青柳のと言つたので時候に合はないと思つたのである。 ○思ひたりげ　思つた樣な樣子で。 ○聞きはてで　では「ずて」の意。…しないでの意味である。 ○青柳のみどりの絲をの歌　「古今著聞集」ではこの歌多少ちがつてゐる。列項評釋の條下參照。「へて」は「經て」と「綜て」とをかけていつたのである。絲を綜るといふのは、經糸を引き延へて機にかけることをいふのである。「はた織」も虫の名と機を織るとにかけていつたのである。「くりかへし」の繰るも絲の緣語である。一首の意は、青柳のみどりの時をすぎて、夏になる、その夏をこえて秋になつて螽斯は鳴くのである。青柳のみどりの絲を繰り絲を繰りして、夏綜て準備して置いたはたを秋になつて織ることであるよ。 ○萩おりたる御直垂　萩の模樣を織り出した直垂である。直垂は古公武諸人が平日著用したもの、仕立方は素襖と同じく、生絹・紗・精好などで作り、方領にて紋なく、袖括があつて、背と前方の兩脇と、後方の兩袖との五箇所に、組緒の菊

綏・駒紐がある。色は多くは木蘭地で、蒲黄、朽葉などもある。萩の模様のあるのを下されたのは、丁度初秋であるから折に適はせての御褒賞と思はれる。　○おし出だして　出だすを強めて言つたのである。○賜はせてけり　「賜はせ」は下二段動詞「賜はす」の連用形、「て」は完了の助動詞「つ」の連用形。「けり」は過去の助動詞「けり」の終止形。

【通釋】　花園大臣源有仁卿のところへ、始めて上つた侍が、名簿のはし書に「能は歌よみ」と書きも書いたものである。秋の初つ方、大臣は寄殿に御出ましになつて、盦斯のなくのを賞で聞いて居られたところが、日もだん〳〵と暮れて來たので

「格子をおろしに誰か來るやうに。」

と仰せられた。これを聞いたくだんの侍は、とりあへず

「藏人五位は折惡しく居合はせんで、外に人も居りませんで。」

と申して御側へ參つたので、大臣は、

「すぐ御前でもよいから格子をおろせ。」

と仰つしやつたので、仰せの通り格子を下したところ、

「そちは歌よみと申すことであつたな。」

との御言葉を頂いたものだから、恐縮して格子を半ば下したまゝにして手をとめた。

「盦斯の鳴聲が耳に入るだらう。一首作つて見よ。」

大臣がかう仰つしやつたので、

「青柳の」

と初句五文字を口に出したのを、そこに居合せた女房たちが何だ今頃「青柳の」だなんて全く時節外れなことを歌ひ出したものだな、といふ樣な樣子をして笑ひだしたので、

「物を最後まで聞いてしまはないで笑ふといふことがあるものか。」

と大臣は仰せになつて、侍へは

「早く次をつゞけるがよい。」

と言はれた。そこで侍は

青柳のみどりの絲をくりかへし夏へて秋ぞはた織はなく

とよんだので、大層御感に預り、萩の模樣を織り出した直垂を出して、御褒美に下された。

【評釋】　巧みに歌をよみなしたことをいふのが主であつて、女房がよくも聞きこらないで笑つたことを、いましめのために書いたのが主だとは思はれない。しかし、さうしたいましめの意を併せ考へて教訓を汲みとることも勿論出來る譯である。これと殆と同じ文が「古今著聞集」の卷第五和歌の部にも出てゐる。

花園左大臣家に、始て參りたりける侍の、名簿のはしがきに、能は歌よみと書きたりけり。大臣、秋の初に南殿に出でて、機織の鳴くを愛しておはしましけるに、暮れければ、「下格子に人參れ」と仰せられけるに、「藏人五位たがひて、人も候はぬ」と申して、この侍參りたるに、「たゞさらば汝おろせ」と仰せられければ、參りたるに、「汝は歌よみな」とありければ、かしこまりて御格子おろしさして候ふに「このはたおりをば聞くや。

一首仕うまつれ」と仰せられければ「青柳の」と、初の句を申し出したるを、候ひける女房達、をりにあはずと思ひたりげにて、笑ひ出したりければ「物を聞きはてずしてわらふやうやある」とおほせられ「とくつかうまつれ」とありければ、

青柳のみどりのいとをくりおきて夏へて秋ははたおりぞなく

とよみたりければ、大臣感じ給ひて、萩折りたる御直垂、推出してたまはせけり。

第四の(四)

寛平の歌合に、初雁を、友則、

春霞かすみていにし雁がねのいまぞ鳴くなる秋霧の上に

とよめる、左方にてありけるに、五文字を詠じたりける時、右方の人々、ことごとくわらひけり。さて次の句に、「かすみていにし」といひけるにこそ、音もせずなりにけり。物を聞きもはてず、ひたさわぎにわろふ事、あるまじき事なり。またさやうにおもひがけぬことも、よむまじきにや。また人ありて、まことのあやまりをしたりとも、我がためくるしみのなからんに、強ちに難じそしりても、何かせん。

【語釋】 ○寛平　宇多天皇御在位中の年號である。（一五四九——一五五七）　○歌合　前出。　○友則　紀有友の子、貫之の甥である。延喜のはじめ官大内記に至り六位を授けられ、貫之等と共に古今和歌集の撰者となつた。「後撰集」「拾遺集」「續古今集」「玉葉集」「續千載集」「續後拾遺集」「新千載集」「新拾遺集」の作家。家集がある。歿年は詳かでない。和歌に長じてゐる。　○春霞かすみていにしの歌　古今和歌集秋上に「題しらず、よみ人しらず」として出てゐる。而して三の句「かりがねは」となつてゐる。「袋草紙」卷三には次の樣に出てゐる。「期詠集に註云春霞かすみていにし鴈金は註云、或人云（以下一行缺文）躬恒于時八月也瀧口戸參詣二餘竹亮下二時秋鴈過鳴有二殉命一獻二和歌一三反唱二春霞字一人々嘲哢愛躬恒於二瀧口戸一稱云到二佳境一云々次讃人々感今察古集爲二他歌一可レ有云々不二諍解一」これでみると友則の歌でなくて、凡河内躬恒の歌になつてゐる。この疑問題があらう。一首の意は、のどけき春霞の中につゝまれて姿をかくして立ち去つた雁は、その時の霞と同じやうなこの秋の霧の上に、あれ今又鳴くことであるよ、といふのである。「春霞かすみて」と同音をくりかへしたのは一種の技巧である。　○いひけるにこそ　この係語「こそ」のむすびが下にはない。亂れた使ひ方である。正しくは「音もせずなりにけれ」とあるべきである。　○ひたさわぎに　一途にさわいで、ひたすらにさわいでの意。　○さやうにおもひがけぬこと　初雁の題でもつて春霞などさはじめるのは思ひがけぬ事であるからかく言つたのである。　○我がためくるしみ云々　自分のために痛痒を感じないのであつたら。　○あながちに無理に、しひての意。　○何かせん　無駄なことである。つまらないことである。詮ないことである。

【通釋】 宇多天皇の御代に行はれた寛平の歌合に、初雁といふ題で次の樣な歌を紀友則がよんだ。

春霞かすみていにし雁がねのいまぞ鳴くなる秋霧の上に

その時、友則は左方であつたのだつたが、初めの五文字をよんだ時に、右方の人々が、みんな笑ひ出してしまつた。所が二句になつて「かすみていにし」と來たので、さきに笑つた人達ぐうの音も出せなくなつてしまつた。一體物事を最後まで聞きも終らないで、ひどく笑つたりなんかすることは、あつてはならない事である。又一方から言つて、そんな思ひがけないやうなことをよみ出すのも、よくない事であるかも知れない。また更に他の方面から言つて、たとへ人が本當の過失をやつたとしても、自分に何の痛痒も無い事であるのならば、しひてそれを批難した

としても、何の益があらう、詮ない事である。

【評釋】　前節の文と趣旨は全く同じである。しかしこれは、全く教訓の方が主になつた書振である。「古今著聞集」でも前項「青柳の」のすぐ次に續いて出てゐる。而して

寛平歌合に、はつ雁を、友則

春がすみかすみていにしかりがねの今ぞなくなる秋霧のうへに

とよめる、左方にてありけるに、五文字を詠じたりける時、右方の人聲々に笑ひけり。さて次の句に、霞みていにしといひけるにこそ、音もせずなりにけれ。同じ事にや。

これがその全文である。

第四の（五）

公任卿の家にて、三月盡の夜、人々あつまりて、暮れぬる春を惜しむ心の歌をよみけるに、長能

心うき年にもあるかな二十日あまり九日といふに春の暮れぬる

大納言うち聞きて、思ひもあへず、「春は三十日やはある」といはれたりけるを聞きて、長能、披講をも聞きはてず出でにけり。さて又の年病をして、限りなりと聞きて、とぶらひに人をつかはしければ、「畏まりて承はりぬ。此の病は、去年三月盡の日、『春は三十日やはある』と仰せられ候ひしに、心うきことかなと承はりしかば、病となりて、そののち物くはれ侍らざりしより、かくなりて侍るなり」と申して、さて其の日失せにけり。

大納言ことの外に歎かれけり。これは、かくほどあるべしとは思はざりけめども、さばかり思ひはかりある身にて、何となく口かろく離ぜられたりける、いと不便なりかし。

【語釋】　○公任卿　藤原公任。關白頼忠の長子であつて詩歌管絃長ぜざるはない。正二位大納言兼按察使に至つた。世に四條大納言と稱してゐる。晩年髪を剃りて僧となつた。「北山鈔」「新撰朗詠」「和漢朗詠集」などの著がある。長久二年薨じた。年七十六。「拾遺集」「後拾遺集」「詞花集」「千載集」「新古今集」「新勅撰集」「續後撰集」「續古今集」「續拾遺集」「玉葉集」「續千載集」「續後拾遺集」「風雅集」「新千載集」「新拾遺集」「新後拾遺集」「新續古今集」等の作家である。　○三月盡　三月の末の日をいふ。　○暮れぬる春　「ぬる」は完了の助動詞「ぬ」の連體形である。暮れてしまはうとする春の意である。　○長能　藤原長能。歌人。權中納言長良の玄孫、伊勢守倫寧の子である。圓融・華山・一條の三朝に歴仕して、從五位上伊賀守となつた。「拾遺集」「後拾遺集」「詞花集」「千載集」「新古今集」「新勅撰集」「續古今集」「續後拾遺集」「風雅集」「新千載集」「新拾遺集」「新後拾遺集」「新續古今集」の作家である。　○心うき年にもあるかなの歌　何といふ情ない年であらうか、二十九日で春がつきてしまふとは。　○大納言　公任卿のこと。大納言といふ官は太政官の次官にて、中納言の上に位し、太政に參與し、可否を獻替し、宣旨を奏することを掌る。亞相ともいふ。　○思ひもあへず　不圖、何げなくの意。　○春は三十日やはある　「やは」は反語の意を表はす。且つ係語となつてゐるので「ある」といふ動詞「あり」の連體形で結んである。春は太陰曆では一月二月三月をいふ。三月の末日は即ち春の盡日である。太陰曆では三月は廿九日なので、長能は二十九日で春が暮れてしまふと惜しんでせめて今一日春のあれかしと言つたのであるが、大納言は、春は三十日もあるものかと何氣なく言はれたのである。　○披講　詩歌などの會にて、詩歌を讀み上ぐること。安齋漫筆の卷一には「歌をふしをつけて歌ふ事なり」と書いてある。　○又の年　その翌年のこと。　○病をして　病氣をやんで、病氣にかゝつての意。　○限りなり　病氣全快の見込たゝず、やがて最期である。　○とぶらひ　見舞のこと。　○

長まりて承りぬ　御見舞の御意ありがたく拜し奉つたの意。病氣の見舞は、病狀如何を尋ねるのが本旨であるから、その御たづねの趣をたしかに拜承したといふのである。　○心うきことかな　殘念なことを言はれたものであるわいと思つたのである。　○物くはれ侍らざりしより　「くはれ」の「れ」は受身の助動詞より轉じた「可能」の意味を持てる「れ」である。原形は「る」こゝへ出てゐるのはその連用形である。「より」は原因理由を示してゐる。勿論助詞である。物がたべられなかつたのでの意。　○かくなりて侍るなり　この樣な病氣にかゝつた上、病狀もか樣に惡くなつたので御座いますの意。　○ことの外に　特別に、甚しくとりわけひどく。　○歎かれけり　この「れ」は同じく受身の助動詞から轉じた敬語の意味の「れ」である。　○かくほどあるべしとは思はざりけめども　自分の言つたことがこんな結果をもたらさうとまでは思ひもかけなかつたのであらうがの意。大納言の心中を言つたのである。　○さばかり思ひはかりある身にて　「さばかり」はそれほど、さほどの意。前を受けて言ふ場合もあるが、このやうに獨立に程度を强めて言ふ場合にも用ひられる。非常に、大變にと譯してよいのである。丁度英語 so. といふ言葉が「その樣に」の意味もあり又 very の意味もあるのとよく似てゐる。大納言は大變思慮の深い人でありながらの意である。　○何となく　思ひかけず、ふと何の思慮もなくの意。　○口輕く　輕率に。　○難ぜられたりける　「難ぜ」は佐行變格活用の動詞の未然形。「られ」は受身より敬語に轉じた助動詞「らる」の連用形。「たり」は完了の助動詞「たり」の連用形。「けり」は過去の助動詞「けり」の連體形。　○不便（ふびん）　不都合なこと、よろしくないことの意。　○かし　山田孝雄氏の文法によれば終助詞で念を押し力を添ふる意味の助詞。

【通釋】　四條大納言藤原公任卿の家で、三月の末の日の夜、人々が集つて、春の暮れて行くのを惜しむ意味の歌をよみ合はれたことがあつたが、その時長能（ながよし）が、

心うき年にもあるかな二十日あまり九日といふに春の暮れぬる

といふ歌をよんだ。大納言はこれをお聞きゝになつて、何の考もなしに「春は三十日なんどあるものか」と言はれるので、これを耳にした長能は、歌の披講をも聞き終らずに退出してしまつた。さて長能はその翌年病にかゝつて、もう最期だといふことを聞かれたので公任卿は、人をやつて病氣を見舞はせられた。その時長能は今はの床で

御たづねの趣ありがたう存じ奉ります。私のこの病は、去年の三月のはての日の、歌の會の時に、『春は三十日やはある』と仰つしやいましたので、まことに情ない事を私は言はれたものだと思ひまして、それがもとになつて病氣になり、その後食慾もだん〳〵減じて參りまして、たうとうこんなになつてしまつたのです。

と御答へして、やがてその日のうちになくなつてしまつたのである。これを見て大納言は非常になげかれた。勿論大納言は自分の何とも思はず言つたことがこんな結果にならうとは思ひもかけられなかつたのであらうけれども、非常に思慮の深い方でありながら、何の考へもなしに批難せられたといふことは、まことに不都合なことであつた。

【評釋】　これは序文にあつた「我は何とたくいひちらして、思ひも入れぬほどに、いはるゝ人は、おもひつめて、いきどほり深くなりぬれば、はからざるに、恥をもあたへられ、身の果つるほどの大事にも及ぶなり。」に全く適合した例であつて、公任卿が何とはなしに言つた言葉が、遂には長能をも殺すに至つたのである。

この話は前にもあげた「袋草紙」の卷二（詳解には三とあるが歌學文庫本では卷二に出てゐる）に出てゐる。

從レ昔執レ道は有レ興事也、長能於ニ花山院一、詠ニ三月盡歌一云、

こゝろうきとしにも有かなはつかあまりこゝのかといふにはるのくれぬる

此歌講時、四條大納言、春は三十日やはあると云々、長能此後痛二此事一て伏レ病聞二萬死一生之由一て、彼大納言以レ使訪レ之、返事云、畏承了、此病非二別言一、先日春は三十日やは有と仰候し、心うく思給て歎レ之間、不食に成て、已今明爲レ罷云々、其後遂以死去、大納言大被二歎思一云々、執人事荒涼に不レ可レ雖歟。

多少字句の相違があるが大體同じである。

又例の「古今著聞集」巻第五和歌の部にも同じ様に出てゐる。

公任卿の家にて、三月の盡の夜、人々あつめて、暮れぬる春を惜む心の歌よみけるに、長能

こゝろうき年にもあるかなはつかあまり九日といふに春のくれぬる

大納言うちきゝて、思ひもあへず「春は三十日やはある」といはれたりけるを聞きて、長能披講をも聞きはてず去にけり。さて又の年病をして、かぎりなりと聞き、とぶらひに人を遣したりければ、「悦びてうけたまはり候ひぬ。この病は、去年の三月盡に、春は三十日やはあると仰せられしに、心うきことかなとうけたまはりしに、病になりて、その後いかにももの食はれ侍らざりしより、かく罷りたりて侍るなり」と申しけり。さて又の日うせにけり。大納言ことの外歎かれけり。是はさうなく難ぜられたりける故にや。

その他「俊賴口傳」(下)「沙石集」(五下)「和歌童蒙抄」(一)などにも大體同樣に出てゐるといふことである。

以上で第四可レ誡二人上多言等一事を終つて、次講は第五可レ撰二朋友一事に入ることにする。

第五　可二撰二朋友一事

或人いはく、人は善き友にあはん事をこひねがふべきなり。「麻のなかの蓬はためざるにおのづから直し」といふたとへあり。蓬は枝さし直からぬ草なり。されども、麻に生ひまじりぬれば、ゆがみて行くべき道のなきまゝに、心ならずうるはしく生ひのぼるなり。心のあしき人なれども、うるはしくうちある人の中に交りぬれば、さすがかれこれをはゞかる程に、おのづから直しくなるなり。これによりて、よき友にあはん事を經にも說かれ、文にもすゝめたり。顏氏が家訓には、

與二善人一居、如レ入二芝蘭之室一。久而自芳也。

與二惡人一居、如レ入二鮑魚之肆一。久而自臭也。

といへり。又或文には、「人の心は水の入物に隨ふが如し。入物細ければ即ち細くなり、入物圓ければ即ち圓くなる。心は朋友にならふ。何ぞ擇ばざるべけんや」とかけり。又九條殿の遺誡には、「高聲惡狂の人に伴なふなかれ」と敎へ給へり。かゝれば、はかなくうち語らはん友なりとも、よく書ける人を擇ぶべし。「薰蕕を異にすべし」となり。花のもとに春ばかりをちぎり、月の前に一夜をかぎる友までも、情あるたぐひは、わすれがたく思ひ出でらるるものなり。すべて友をかたらふには、へだつる心なきを德とす。ゆめゆめ心あしからん人には伴なふべからず。芝澗に住みし四人の翁、竹林に籠りし七賢の類、さこそおもはしき友なりけめ。子猷は雪の夜、月にあくがれて、はるかに剡縣の安道を尋ね、淵悛は、清風朗月に、玄度のなきことを恨みける。誠に

心にかなふ友のなからんには、いかなる興宴も物うく覺えぬべし。さればこそ梁の孝王は鄒・枚ときこえし二人の臣さりにしかば、兎園の遊をも止め給ひ、魯の仲尼は、子路といひしおもはしき弟子におくれて後には、たがひにすゝめける物をも捨て給ひにけれ。清和第九の皇子、貞貞親王の作り給へりける、

鄒枚散後平臺靜　空遺春風一只斷腸

文選第二十一卷、魏文帝與吳質書にはく、

昔伯牙絕絃於鍾期、仲尼覆醢於子路、痛知音之離、傷門人之莫逮。

【語釋】　○朋友　朋は同門のとも、友は志を同じくするとも。周禮大司徒の註に「同師曰朋」とあり、說文には「同志爲友」とあり。併せてともだちのこと。　○麻のなかの蓬はためざるにおのづから直し――荀子の勸學篇に「蓬生麻中、不扶而直」とあるに本づいていふ諺語。蓬の曲りくねつてゐる蓬も、眞直に生ひ立つ麻の中に育てば、共に眞直になるごとく、人も善人と交れば、その感化によつておのづからに善良の人となる事を譬へて言つたのである。「ためる」といふのは曲つてゐる所をたゞしなほすことをいふのである。矯といふ字を宛てる。　○枝さし　枝つき、枝の伸び具合。枝の趣かうとする方向をいふのである。心の趣く方向が志である。　○生ひまじりぬれば　一緒に交つて生長するといふとの意。この「ぬ」は完了の助動詞であるが、こゝなどは完了の意味はない。たゞたしかに強くいふ意味に使はれてをるのである。　○心ならず　本心に反して、蓬は本性として曲りたがつてゐるものであるから、眞直になることをかく言つたのである。○生ひのぼる　生長すること。生ひたちて高くなることをいふ。　○うるはしくうちある人　うるはしい心、善良なる心を持つてゐる人、「うちある」の「うち」は接頭語で意味がない。　○さすがに　さうはいふものゝ、たゞへ心のあしい人ではありながらも。　○かれこれをはゞかる程にあちこちと心を勞してゐるうちに。「かれこれ」といふのは自分の周圍の善人に對して言ふのである。「はゞかる」は遠慮するのである。自分の惡をほしいまゝに行ふことをはゞかるのである。　○顏氏家訓　書名、北齊の黃門郎顏之推の著書。二卷。儒教に本づき世故人情に於て利害を深明し、經訓を以てかざつたもの。佛法のこともあり。字寶音訓のこともあり、典故もある。　○芝蘭之室　「芝」は靈芝、「蘭」はふぢばかま、共に香の高い草である。さうした香草のある室、これを善人に譬へたのである。「孔子家語」の中にかうある。「孔子曰、與善人居、如入芝蘭之室、久而不聞其香、即與之化矣」家訓の本文はこの家語の語に依つたものである。　○鮑魚之肆　乾魚の市場をいふ。　惡臭がひどいのでこれを惡人に譬へたのである。　孔子家語には「與不善人居、如入鮑魚之肆、久而不聞其臭、亦與之化、是以君子、藉其所與處焉。」とある。家訓の原文である。家訓の引用文は全體で次の意味になる。心の善い人と一緒に交つて居るのは、丁度香草芝蘭之室に入つて居るのと同じ樣なものである。暫らく共に居る間に自然とその芳香を受けて自分も善人に同化するものである。又反對に、惡人と交つてをるのは、恰も乾魚の市場に入つたも同じである。暫らく居るうちに、その惡臭に染みて自分もくさくなつてしまふ樣に、惡人の影響をうけて自然と惡化するものである。而して自らは之を意識しないのであるから恐ろしいのである。　○人の心は水の入物に隨ふ云々　石橋氏も詳解に『出典詳ならず。荀子に「君者槃也、槃圓而水圓、君者盂也、盂方而水方」韓非子に「爲人君者猶盂、民猶水也、盂方水方也、盂圓水圓」孟子の疏に「表正則影正、盤圓則水圓、盂方則水方」とも見ゆ。按ずるにこれ貞觀政要の文などによれるにて、別に出典あるにはあらざるべし』と言つてゐる。だから或文といふのは何だか分らない。その意味は、人の心は譬へてみれば丁度水がその入物と同樣に變化するのと同じである。入物が細いと水も細くなるし。入物が圓いと水も圓くなる。これと同じ樣に心もその交る友に從つてその友人のそれのごとく變化する。どうして友人を選擇して交らずには居られようや。とい

ふのである。　○九條殿の遺誡　九條殿は藤原師輔のこと。その遺誡に就いては前出。　○高聲惡狂の人に伴なふ事勿れ　遺誡の原文には「又莫レ伴二高聲惡狂之人一、其所レ言事、輙不レ可二聞審一、三度反覆、與レ人交レ言云々」とある。「高聲」は一寸したことを話すにも聲高くいふ人。「惡狂」暴惡といふ程ではないが狂氣じみた言行を弄する人をいふ。　○はかなくうち語らはん友　假初に話を交す程の輕い程度の友人をいふ。　○薰蕕器を異にすべし　薰はよきにほひのする草、又はよきにほひ、從つて德行・善行・君子にたとへて言ふ。蕕は惡臭を持つ草、又は惡臭、從つて非行・惡行・小人にたとへていふ。「世說」の方正篇に「培塿無二松柏一、薰蕕不レ同レ器」とあるに本づいて、善きものと惡しきものとは一處に居ることの出來ないことを譬へて言つた諺である。　○花のもとに春ばかりをちぎり云々　花の咲いた下でたゞ春の間だけを互に交はる樣な深くない友人のこと。單なる花見友達程度の友人をいふ。下の「月の前に一夜をかざる友」といふのも、春を秋にかへ、花を月に變じただけのもので意味に變りはない。　○わすれがたく思ひ出でらるるもの　忘れ難くて自然に思ひ出されて來ることをいふ。「らるゝ」は自發の助動詞「らる」の連體形である。受身より轉じて自發となるのである。　○友をかたらふ　友と親しく交る意。　○へだつる心　所謂隔心である。打とけない心をいふ。　○芝澗に住みし四人の翁　芝澗といふのは芝草の生え茂つてゐる谷間のこと。次の竹林に對して言つたのである。四人の翁は、南山の四皓のことで、東園公、夏黃公、甪里先生、綺里季の四人をいふ。この四人は秦の難を避けて、商洛山中に隱れてゐたのであるが、のち漢の孝惠帝の太子であつた時、招かれたので出て仕へた。四人とも年齡は八十餘歲で、鬚眉皓白であつたので四皓と言つた。この四人は共に親友であつた。　○竹林に籠りし七賢　晉書の嵇康傳に出てゐる七人の賢人。支那晉代の一種の無世家七人をいふ。即ち嵇康、阮籍、阮咸、向秀、劉伶、山濤、王戎の七人である。共に竹林に遊んだので竹林の七賢又は竹林の七子といふ。　○さこそおもはしき友なりけめ　實に氣の合つた模範的の親友であつたであらう。　○子猷は雪の夜云々　晉書の列傳に出てゐる。子猷は王徽之といふ人で、嘗つて山陰に居つたことがある。一夜雪霽れて月の色が美しかつたのでこれを見ながら獨り酒をのんでゐた。忽ち友人の戴逵のことを憶ひ出したのである。逵は時に剡縣に居つたので、すぐその夜小船に乘つて之を尋ねた。まさに逵の門前まで行つたのであるが、中に入らないで歸つて來た。人は不思議に思つてその故を尋ねた、子猷がいふには、もと〳〵興に乘じて出かけて行つたのであるから、興がなくなつたら歸るのは當然ではないか、といつたといふ話である。　○安道　戴逵の字である。剡縣は會稽にある。　○劉惔は清風朗月に云々　同じく晉書の列傳に「劉惔字眞長、沛國相人、舊註云、惔夜在二簡文座一、愀然歎曰、清風朗月、恨レ無二玄度一」とある。玄度は晉の高士許詢の字である。自然の好景に當つては共に眺めん友を思ふのは人情の常である。　○物うく　つまらなく、物足りなくの意。　○梁の孝王は鄒・枚ときこえし二人の臣云々　梁の孝王は文帝の子であつて、四方の豪傑を集める事がすきであつたので、山東の游士の至らぬものはなかつた。鄒陽、枚乘は共に孝王のもとに游んだ人である。鄒陽は齊の人、枚乘は淮陰の人で共に名士であつた。その文は文選にも出てゐる。「兎園の游」といふのは、兎園で孝王の行つた游びである。孝王は宮室園囿を作ることをよろこび、曜華之宮を作ると共に、兎園といふ立派な庭園を作つて朝廷の人や客人と釣などをして遊んだのである。鄒陽や枚乘が去つた後はこの遊びを止めたといふのである。　○魯の仲尼は子路といひしおもはしき云々　魯は國名、仲尼は孔子の字、子路は字を由といふ孔子の弟子である。孔子はその弟子の子路が醢(しゝびしほ、肉のひしほである)にせられたのを聞き給ひて、その好める醢をも遠ざけられたといふ話が禮記の檀弓篇にも見えてゐる。又孔子が子路を哭した話は孔子家語にも見えてゐる。　○貞眞親王　清和天皇の皇子、承平二年九月薨、年五十七。　○鄒枚散後平臺靜、空遺春風只斷腸　鄒枚は前に出てゐた通り梁の孝王の許に集つた名士。平臺は梁の孝王の造營した離宮の名。王宮より三十餘里離れたところにあつた。詩の意味は、鄒陽枚乘が孝王の許を去つてしまつて後は、さしもの平臺も靜かになつてしまつて、徒らに春風のみ吹いて人なきあとは斷腸の思を催さしめるばかりである。新撰朗詠集の詠史の所には只といふ字が且となつて出てゐる。　○昔伯牙絶絃於鍾期云々　伯牙は支那周代の音樂家で

ある。昔つて成運に就いて琴を學び、三年にして成らず、成運に伴はれて、一海島に至り修練して終に天下の名手となつたといふ。鍾期は鍾子期のこと。支那周代の楚の人、音をきくに妙を得てゐたといふ。列子の湯問篇に、「伯牙善鼓琴、鍾子期善聽……子期死、伯牙絶絃、以無知音者」とある。又呂子春秋にも「鍾子期死、伯牙破琴絶絃、終身不復鼓琴、以爲無足爲聴者」とある。又文選の註にも「伯牙善鼓琴、而鍾子期妙知伯牙琴音、故鍾期死、而伯牙絶絃、不復鼓琴、痛知音之難遇也、衛人殺子路而醢之、仲尼覆醢、傷子路之賢、門人莫及也」とある。昔、伯牙が、鍾子期が死んでしまつてからは絃を絶つて琴をひかなかつたり、仲尼が、子路の死後醢をくつがへして近づけなかつたりしたのは、知友再び得がたく、門人又之に並ぶものを求め得がたかつたからである。魏の文帝が桑賀に與ふる書は、新撰朗詠集の交友のところにも出てゐる。

【通釋】　これも或人の言つたことである。人は善い友人と交らうといふことを絶えず求めなければならない。「麻のなかに生ひ立つた蓬は、その曲りくねつたところを直さないでも、麻の感化をうけて、自然にまつすぐに育つものだ」とは尤もなたとへである。蓬はその枝つきのたゞしくない曲つた草である。しかし、麻の中に交つて生長するといふと、曲つて伸びようにもその伸びる道がないので、從つて本性に違つて正しく生長して行くのである。人間に就いて言つても全くこれと同じことである。心のまがつた惡人であつても、心の美しい善人と交つてゐるうちには、いかに惡人でも、周圍の善人に對して心がおかれるので、自然と正しい言行を持する樣になるものである。だからして、善い友人に交るべき事は、經文にも文章にも書かれて、すゝめられてゐるのである。顏氏の家訓には、

善人と共に交つてゐるのは、たとへてみれば、芝蘭のやうな芳草のある部屋に入つてゐるのも同じことである。久しくその部屋にをるうちに自分も芳草の匂をうけて薫ばしくなると同じやうに、善人の徳化をうけて自然と自分も善人になるものである。又これと反對に、惡人と共に交つてゐるのは、たとへてみれば乾魚の澤山並べてある市場に入つてをる樣なものである。その惡臭が身にしみて自分もいつのまにか臭くなつてゐるのと同じやうに、惡人の影響で自分もいつのまにか惡い人間になつてしまつてゐるものだ。

と言つてある。まことにその通りである。又或文には、

人の心は丁度水がその入物の形どほりになるのと同じことである。入物が細ければ水も細くなるし、入物が圓ければ水も圓くなる。これと同樣人の心も友人の心の通りになつて、友人が柔弱であれば自らも柔弱となり、友人が圓滿であれば自らも圓滿となる。だから友人といふものはよく選擇して交らなければならないものである。

と書いてある。又九條師輔公の遺誡には、

高聲惡狂の人と交つてはならない。

とも御敎へになつてゐる。故にほんのかりそめに言葉を交へるにすぎない程度の友人でも、よくその人を擇ばなければならない。

薫蕕器を異にすべし。

といふ意味もやはり同樣である。花の咲いた下でほんのかりそめに一杯の盃を交す花見友達、さては月を前にしてともにその秋色を賞でる同吟の友でも、本當の友情をもつて交つたとしたならば、その友情の時期はよし短いにし

ても、後になつて忘れ難く思ひ出さずにはゐられないものである。一體友人と交るには、隔心を置かないのが最もよい。隔心をおかなければ交れない樣な、心の惡い人とは決して決して交つてはならない。芝澗に住んだといふ南山の四皓や、竹林に清談を交したといふ七賢人などは、どんなにか理想的の友人であつたらうか。思ふだに羨しい限りである。子猷は雪の夜、月の美しさにあこがれて友を思ふこととしきりに、船に乘つてはるかに遠い懐縣の安道といふ人を尋ねに行つたではないか、又劉惔は、清風明月に對して友人玄度と共に居らないことを恨み悲しんだではないか。本當に、心のあつた友人と共にでなかつたならば、いかなる興宴も面白くは感ぜられないであらう。それだからこそ、梁の孝王も、鄒陽や枚乘の二人の臣が居なくなつてからは、兎園の遊をも廢止してしまひ、魯の孔夫子も、子路といふ心に叶つた弟子が醢にされて殺されてしまつてからは、嘗つ喜んで食べた醢も、その弟子の殺されたものに似通つてゐるので堪へられなく、これに手もつけられなくなつてしまつたのである。清和天皇第九の皇子、貞眞親王のお作りなつた詩にも、この心がうたつてある。

鄒陽・枚乘の去つてしまつた後の離宮平臺は、何の遊も催されることなく誠に靜であつて、徒らに春風のみが昔の樂しかつた交遊を思ひだし顏に吹くのみで、情景たゞ腸を斷たしめるものがあるばかりである。

又、文選第二十一卷にのつてゐる、魏の文帝が吳質に與へた書の中にも、同じくなき友人なき弟子を痛む心がのべてある。

昔、伯牙は自分の琴を本當に聽いてくれた友人の鍾子期がなくなつてからは、絃を絶つて再び琴を彈じなかつた。孔子も弟子の子路がしほびしほにされてからは、醢を捨てゝ口にしなかつた。これ等はいづれも、知音の得がたきを悲しみ、門人の得がたきをいたんでの事より外ではない。まことに知己といふものはこの世に稀いものである。

【評釋】 文旨は極めて明瞭である。

一、朋友を撰ぶには善友を撰ばなければならないこと、その理由は自然の德化を尊重するからである。從つて惡友の斥くべきは反面の理よりして自ら明かである。

二、すべて友と交るには隔心をおかず、肝膽相照の態度を以て、互に知己たる態度を以てすべきこと。

第五の(一)

後三條院、東宮にておはしましける時、學士實政朝臣、任國に赴きけるに、餞別の名殘惜しませ給ひて、

州民縱作甘棠詠、莫忘多年風月遊

此の意は、毛詩にいはく、「甘棠勿伐、召伯所茇」といへる事なり。又御歌に、

わすれずばおなじ空とも月を見よほどは雲ゐにめぐり逢ふまで

「君たれとも臣たれども、たがひに志の深く、隔つる思のなきは、朋友にひとし」といへり。

【語釋】 ○おはしまし 在るといふ動詞の敬語である。「います」といふのも同意である。 ○ける 過去の助動詞「けり」の連體形である。 ○學士 古の春宮坊の職員で、經書の講說をつかさどつた人である。 ○實政朝臣 日野式部大輔資綱の子で、本

文は甲斐の國守となつて任に赴く時の話である。○餞別　はなむけのこと。「馬のはなむけ」の略、もと旅立つ人に酒肴などをすゝめ、その馬の口をとつて、馬の鼻を行くべき方へむけて見送り、首途の安全を祝する習慣があつたのにもとづく。旅立つ人に品物又は詩歌などを贈ること、又はその贈るものをいふ。　○州民縦作甘棠詠云々　甘棠は山梨の類で果實の甘い植物。甘棠の詠といふのは、支那の周の太保召公奭が、南方を巡行して、文王の政を賞べた時、甘棠の下に宿つたことがあつた、後の人が召公を慕ふあまりに、その棠樹をも大切にしたことを述べた詩のことである。詩經の召南篇に見えてゐる。

蔽芾甘棠、勿レ剪勿レ敗、召伯所レ憩、
蔽芾甘棠、勿レ剪勿レ拜、召伯所レ説、

東宮の詩の意味は、

君が赴任して行つて德政をしき、任國の人々があの召伯の德を慕つたやうに、甘棠の詠を作つて君の德を慕ふやうなことがあつたとしても、多年君と交つた風月の交遊を忘れないやうにしてほしい。

といふのである。この東宮の詩は新撰朗詠集の中に出てゐる。　○毛詩　魯の毛亨（大毛公）と趙の毛萇（小毛公）が傳へた古代の詩、即ち今の詩經のことである。　○甘棠勿レ伐、召伯所レ茇　は前註を見よ。　○わすれずばの歌　新古今集、離別の部に「みこの宮ゝ申しける時太宰大貳實政學士にて侍りける、甲斐守にて下り侍りけるに餞たまはすとて」の詞書ありて、後二條院御歌

思ひ出でば同じ空とは月を見よほどは雲ゐにめぐり逢ふまで

と出てゐる。即ち昔業に多少のちがひがある。その歌の意味は次の通りである。甲斐の國と自分のをる都とは、道のへだたりは雲居はるかに遠くはあつても、月は一つ空のものであるから、自分を思ひ出してくれる時には、この月を見て、同じ空に思ひを

はせてゐると思つて慰めてくれ。君が都へかへつて來て再びめぐりあふまでは。この歌は拾遺集に出てゐる橘忠基の、「わすれなよ程は雲居にたりぬとも空ゆく月のめぐりあふまで」を本歌にしてよんだものであらう。　○君たれども臣たれども　說苑の君道篇に出てゐる「王者之臣、其名臣也、其實友也」とあるに同じ意味であつて、君と臣との區別は表面上はあつても、君臣たがひの間に志が深く、隔つる思がなくて親しかつたならば、その關係は朋友といつてもよいのである意。

【通釋】　後三條天皇がまだ東宮で入らせられた時、東宮侍讀であつた實政朝臣が、甲斐の國守となつて赴任した時、惜別の情にたへないではなむけの詩歌を御贈りになつた。その詩に、

任國の人達から大に慕はれて、かの召伯の樣に甘棠の詠を以て德をたゝへられる事があつたとしても、苟き多年の交遊を風月につけても忘れないやうにしてほしいものだ。長い風月の樂を別つた君よ。

と仰つしやつた。この意味は例の詩經に

甘棠勿レ伐、召伯ノ所レ茇。

とあるのを下にもつての詩である。又、御歌には

わすれずばおなじ空とも月を見よほどは雲ゐにめぐり逢ふまで

といふのを御作りになつて、實政朝臣に贈られた。一方は東宮、一方は學士、君臣の關係は嚴然と存してゐるのであるけれども、たがひに相いつくしむ志が深く、その間に隔意なき親交があつたとしたならば、それは君臣の關係ではなくて朋友の間柄といつてもいゝ位なのである。かういふ意味のことは既に古人も言つてゐる所なのである。言はゞ義は君臣、情は朋友とも言ふべきである。

【評釋】　この話は友情關係の親密なることを、君臣主從の間柄に於て述べたのである。「古今著聞集」卷第四文學の條にも全く同文が出てゐるが、和歌はない。すなはち、

後三條院東宮にておはしましける時、學士實政朝臣任國に赴きけるに、餞別のなごりを惜ませ給ひて、御製かゝりけるとかや

州民縱作二甘棠詠一　莫レ忘多年風月遊

この意は、毛詩にいはく「蔽芾甘棠、勿レ剪勿レ伐、邵伯之所レ宿也」といへる事なり。（有朋堂文庫本による）これである。「古事談」一によつて十訓抄は書いたものであらうといふ。「古事談」一所載の本文は次の如くである。

實政卿爲二春宮學士一之時、拜二中斐國守一、赴レ任之刻自レ宮賜二餞別之詩歌一、

州民縱爲二甘棠詠一、莫レ忘レ忘、多年風月遊

蓋邵伯受領下向之時、國民雲集舉レ愁、伯下レ馬分レ憂、其所有二梨木一、曰二之甘棠一、毛詩曰、甘棠莫レ伐、邵伯所レ宿也云々、御歌

ワスレズバオナジ空トハ月ヲミヨ程ハ雲井ニメグリアフマデ

（改訂史籍集覽ニヨル）

第五の（二）

伯牙と鍾子期とは、琴の友なりけり。鍾子さきだちて失せにければ、「今は誰にか琴の音を聞きしられん」とて、其の絃をはづしてひかざりけり。さきにいへる文選の文は、此のこゝろなり。元稹と樂天とは詩の友にておはせしが、元稹はかなくなりしかば、樂天、其の作りたりし詩どもを、三十卷書き集めて、唐の大敎院の經藏にぞ籠めおかれける。

遺文三十軸、軸々金玉聲、
龍門原上土、埋レ骨不レ埋レ名。

とは、これをかゝれたるなり。樂天、又ある文の友によせらるゝ詩にいはく、

交情鄭重金相似。詩韻清鏘玉不レ如。

誠によき友の交はりは、何よりも面白かるべし。阮家の南北の垣をも隔てず、貧しきをも恥ぢざりし、いかなる事を契りけん。孟母が子を思ふ故に、隣を三度までかへけるも、友をえらぶ心、これまたとりどりなり、友につきて、斷金・伐木のちぎりなどいふ事あれども、人皆口づける上に、こと長ければしるさず。山鳥の鏡に向ひて鳴き、鴻雁の行をなして飛ぶ、皆友を思ふ心なり。佐保の河原の霧の中に、友まどはせる千鳥の夕暮のこゑ、すごくこそ聞ゆれ。さゆる入江の波の上に、つがはぬをしのうきねも、下やすからぬ思のほど、さこそと哀なり。友なし小舟のほのかにこぎ行く、明石の浦の鳥がくれ、友とする人少なかりける、東路の八つ橋のわたり、かれもこれも、思ひやられて心ぼそし。

【語釋】　○伯牙と鍾子期　前註に述べておいた。　○琴の友　琴によつてつながれた友情を持つ友人。酒の友といへば酒に媒介された友人のこと。　○聞きしられん　「れ」は受身の助動詞「る」の未然形。　○元稹と樂天　元稹字は微之、唐代の詩人で白樂

天と文名相並んだ人であつて、この人の詩風を元和體と呼んだ。その著に元氏長慶集がある。樂天は白樂天、白居易ともいふ。唐代隨一の詩人。その著に白氏文集がある。　○遺文三十軸云々　この詩は白樂天が元居敬といふ人の文集に題した詩であつて、元稹のことをいつたのではないのを、十訓抄の著者が、同じ元なので誤つて同一人と思つてこゝに引いたのである。この詩は白氏文集五十一に、「題二故元少尹集後一二首一」として出てゐる。和漢朗詠集文詞にも出てゐる。遺文三十軸とは遺文三十卷のこと。金玉聲といふのはその詩文の立派であることを褒めたゝへたのである。美くしくして尊ぶべきを金玉といふ。龍門は地名で元居敬を葬つたところである。全體の意味は、元氏死後に遺された詩文すべて三十卷あるが、どの卷とて金玉の聲ならぬはない。氏を葬つた龍門原上の土は、骨こそ埋むることはいへ、その文名を埋むることは出來ない。龍門原頭草茫々となつても氏の文名は嘖々として後代不易であらうと、元氏をたゝへたのである。　○交情鄰重金相似云々　白氏文集三十四に、「織之尙書、自二余病一來、寄遺非レ一、今以二此篇一　用伸二酬謝一」と題して出てゐる律詩の一部である。交情は友情のことである。鄰重はその友情懇切ので篤いことをいふ。金相似とは、友情のあついことを金にたとへていつたのである。易經の繫辭に「二人同レ心、其利斷レ金、同心之言、其臭如レ蘭。」と出てゐて、朋友の親密なる交情を金に譬へることは多い。詩韻は詩のもつてゐる味、風趣をいふ。清鄰は玉の聲を譬へていつたので、美しいことを褒めて言つたのである。全體の意味は友情のあついことは金にも等しく、その詩趣のすぐれたること清鄰の聲があつて玉の聲も及ばない位である。　○阮家の南北の垣をも隔てず　新撰朗詠集の「隣家」に「無墻隣家」齋丘未高として出てゐる。

阮家南北舊來隣、不レ隔二墻垣一不レ愧レ貧。

このことは晉書の阮咸傳に詳しく出てゐる。「阮字仲容、與レ籍居二道南一、諸阮居二道北一、北阮富而南阮貧、七月七日、北阮盛曬二衣服一、皆錦綺爛レ目、咸以レ竿掛二大布犢鼻于庭一、人或怪レ之、答曰、未レ能レ免レ俗、聊復爾耳」

北阮南阮の兩家は道を隔てゝ相住み、貧富甚しき差があつたのであるが、それをも厭はなかつたのは誠の友情といふべきであると感心したのである。　○孟母が子を思ふ故に　所謂孟母の三遷である。孟子の母ははじめ墓の近くに住み、次に市の傍に居を移し、更に學舍の傍に移つた。その居を移すに從つて子供であつた孟子は、墓間葬式のまねごとから、商人の賣買の眞似、更に俎豆を設け揖讓進退禮に叶ふ樣になつた。これ即ち子供の環境よりの影響、いはゞ友人の感化を慮つての三遷なのである。　○斷金・伐木のちぎり　斷金のことは前に註した通りである。伐木は詩經、小雅篇にある詩である。

伐レ木丁丁、鳥鳴嚶嚶、出レ自二幽谷一、遷二于喬木一、
嚶其鳴矣、求二其友聲一、相二彼鳥一矣、猶求レ友聲、
矧伊人矣、不レ求二友生一、神之聽レ之、終和且平、

この詩は朋友故舊を思つてなつかしむ意味を歌つたのである。伐木の契といへば親しい友達の交情をいふのである。　○人皆口づける　誰もが口にするといふ意、つまり人口に膾炙してゐることをいふ。　○山鳥の鏡に向ひて鳴き　清少納言枕草子「鳥は」の段に「山鳥は、友をこひて鳴くに、鏡をみすれば慰むらむ、いと哀なり。」とある。萬葉集の十四に「山鳥の尾ろのはつ尾に鏡かけとなふべみこそ名によそりけめ」とあつて山鳥と鏡とが相並んで用ゐられてゐる。奥儀抄には「この鏡のこと、或物には、昔隣の國より山鳥を贈りて、鳴聲妙なる由を申しけれど、すべて鳴かざりけるを、或女御、友を離れて鳴かぬならん、鏡をかけて見せ給へと申しければ、籠に鏡を懸けたりけるに、影を見て鳴きけり。」とある。又、俊賴口傳の上にもこの歌を載せて次の樣に出てゐる。「昔隣の國より山鳥を奉りて、鳴聲によりて、聞くものうれへを忘ろと云へり。帝是をえ給ひて悦びてかひ給ふに、また鳴事なし。女御のあまたまし〳〵ける、『此鳥鳴せたらん女御を后にたてん』と宣旨を下されたりければ、我も〳〵となかせんとしけれども、更に鳴する事を得ず。此中におもひはかりおはする女御の『友をはなれて、獨りあればなかぬなり』とて、明な

る鏡を、籠のつらに立てたりければ、おのが影を見て、わが妹鳥と思へるにや、よろこべるけしきにて、鳴事を得たり。尾をひろげて、鈴のおもてにあてゝ、悦び鳴聲實に繁し。是をなかせし女御、ききに立ち給へりしかば、かたはらの女御たち、ねたみ給ふ事限りなしと云へり。」これは支那の傳説で、「事文類聚後集」に次の通り出てゐる。「昔闔賓王結二置嶧卯之山一、獲二一鸞鳥一、王甚愛レ之、欲二其鳴一、而不レ能レ致、乃飾レ以二金樊一、爨レ以二珍羞一、對レ之逾戚、三年不レ鳴、其夫人曰、嘗聞鳥見二其類一而後鳴、何不二懸レ鏡映一、王從二其意一、鸞覩レ形悲鳴、哀音響二中宵一、一奮而絶云々」この鸞鳥を山鳥と譯したものであらうか。　○佐保の河原の霧の中に、友まどはせる千鳥の夕暮のこゑ　拾遺集、冬の部に、「題しらず」、紀友則の歌「夕されば佐保の川原の河ぎりにともまどはせる千鳥なくなり」と出てゐる。これによつて書いたものである。友まどはせるとは、友を行方知れずならしめたことで、自分が友からはぐれたことである。　○さゆる入江の波の上に云々　千載集、戀の三に、「堀川院の御時百首の歌奉りける時戀の心をよめる」と題して、大納言公實の歌「ひとり寢るわれにて知りぬ池水につがはぬをしのおもふ心を」と出てゐる。をし鳥は雌雄非常にしたしくする鳥とされてゐるが、その雌雄の離れてゐるのをつがはぬと言つたのである。つがふは雌雄二羽の一組が一緒にゐることをいふのである。對でゐることをいふ。　○下やすからぬ思　心の中で不安に思つてゐることである。下といふのは心の中の意である。　○友なし小舟のほのかにこぎ行く明石の浦の島がくれ　古今集、羇旅の部に出てゐる歌「ほのぼのとあかしの浦のあさ霧に島隱れゆく舟をしぞおもふ」によつてかいたもの。この歌の作者古今集では分らないが、柿本人麿、或は小野篁か等と説がある。　○友とする人なかりける東路の八つ橋のわたり　古今集、羇旅、前の歌「ほのぼのと」のすぐ次に「あづまの方へ、友とする人、ひとりふたりいざなひていきけり、三河國八橋といふところにいたりけるに、その川のほとりに、かきつばたいとおもしろく咲けりけるを見て、木の蔭におり居て、かきつばたといふいつもじを、句のかしらにすゑて、旅のこゝろをよまむとて詠める」と題し、在原業平朝臣の歌「から衣きつゝなれにしつましあればはるゝばるゝきぬる旅をしぞ思ふ」が出てゐる。實はこれは伊勢物語にも出てゐる話で、古今集と孰れがさきかといふ事に就いては學者の間にも説のあることなのである。伊勢物語には次の如く出てゐる。「むかし男ありけり。その男身をやうなきものに思ひなして、みやこにはをらじ、すむべき所をもとめんとてゆきけり。しなのゝ國あさまのだけにけぶりのたつを見て、

しなのなるあさまのだけにたつ煙をち方人のみやはとがめぬ

もとより友とする人ひとりふたりしてもろともにいきけり。みちしれる人もなくてまどひいきけり。みかはのやつはしといふ所にいたりぬ。そこをやつ橋といふ事は、水のくもでにながれわかれて、木やつわたせるによりてなんやつはしとはいへる。その澤のほとりの木かげにおりゐてかれいひくひけり。その澤にかきつばたいとおもしろく咲きたり。それを見て、ある人のいはく、かきつばたといふ五もじを句のかみにすゑて旅のこゝろをよめといひければよめる、

から衣きつゝなれにしつましあればはるゝばるゝきぬる旅をしぞ思ふ

とよめりければ、みな人かれいひのうへに涙おとして、ほとびにけり。」その前後はとにかくとして、十訓抄の本文は、前の歌との連絡から考へて、古今集に基いて書いたものと思はれる。古今集、伊勢物語共に友とする人ひとりふたりして行つたとあるから、十訓抄本文では友とする人少かりけると書いたのである。

【通釋】　伯牙と鍾子期とは、琴で結ばれた知友であつた。ところが鍾子期の方が先に死んでしまつたので、伯牙は、

「鍾子期を失つては、自分の琴を本當に聞き分けて呉れる人が何處にあらう。　誠の知音は鍾子を措いて外にはないのだ。」

かういつて、其の絃を取り去つて再び琴に手に觸れようともしなかつた。さきに述べた文選の魏の文帝が呉質に與へた書中の文は、この意味を記したものに外ならない。又、元稹と白樂天とは互に詩友であつたが、元稹が亡くな

つたので、白樂天は故人の作つた詩文を三十卷に書き集めて、唐の大敎院の御經藏の中に收めて置いた。

元氏の遺文あはせて三十卷、卷々すべて金玉の聲ならざるはない。彼を葬つた龍門原上の土は、骨を埋めはしたが名までは埋め切れない。遺文の存するところ彼の名は不朽である。

とは彼(實は十訓抄著者の誤りで、白樂天はこの詩句を元居敬のために書いたのであつたが)が友人を讃美したものであつた。白樂天は又或る文の友人に送つた詩にかうもかいた。

友情の厚くして濫らざること恰も金の如く、その詩文の風趣清鏘の響あつて實に金玉もたゞならぬ位である。

實は善友との交情は人生の清福といふべきである。南北僅かに道一筋、垣一重を以て相隔てた阮家の交際は、敢て貧富を問題とはしなかつたのである。かくて如何なる契をかはした事であつたらうか、想像するだにゆかしい限りと言はなければならない。又例の聖賢孟子の母が、三度まで居を移したといふのも、子供のために友人を選擇したためと言つてもよい。いづれとして友を重んぜざるはない。友情に就いては、斷金・伐木の交りなどいふ事が言はれてゐるが、これは皆人口に膾炙してゐることであるし、又一々をのべれば贅長になる事でもあるから、こゝでは省略することにする。枕草子に見えてゐる山鳥が鏡に向つて鳴いた話とか、雁が列を作つて飛びわたるとかは、皆これ友を思ふ心故のことである。或は又佐保の河霧の中に、友にはぐれてないてゐる千鳥の夕暮のこゑゝか、寒さ身にしむ入江の波の上で、つれあひを失つたをし鳥のうきねの、安からぬ思ひのほど、思ひやるだに哀れといはなければならない。孤舟がほのかに漕いでゆく明石の浦の島かげも、わづかの友と下つて行つた東路の八橋あたりも、いづれも友なき淋しさを思はせないものはない。

第六、可レ存二忠信・廉直旨一事

或人いはく、孔子のたまへる事あり、「偏に君に從ひ奉る、忠にあらず。偏に親に從ふ、孝にあらず。諍ふべき時あらそひ、從ふべき時したがふ。これを忠孝とす。」しかれば、主君にてもあれ、父母、親類にてもあれ、知音、朋友にてもあれ、惡しからん事をば、必ずいさむべきと思へども、世の末にこの事かなはず。人の習にて、思ひ立ちたる事を諫むるは、心づきなくて、いひかはす人は、心にかなふやうにもおぼゆれば、天道はあはれともおぼすらめど、主人の惡しき事をいさむるものは、顧を蒙る事ありがたし。さて、する事のあしき樣にもなりて、しづかに思ひ出づる時は、其の人の、よくいひつる物をと思ひ合はすれども、又心の引く方につきて、思ひたる事のあるときは、むつかしく又諫めんずらんとて、此の事をきかせじと思ふなり。これはいと愚なる事なれども、皆人の習なればはらぐろからず、又心づきなからぬ程にはからふべきなり。すべて人の腹立ちたる時、こはく制すれば愈々いかる。盛りなる火に少なき水をかけん。その益なかるべし。然れば譏嫌をはばかりて、やはらかに諫むべし。君もし愚なりとも、賢臣相輔けば、其の國亂るべからず。親もし驕れりとも、孝子慎みてしたがはば、其の家全かるべし。重き物なれども、舟に載せつれば、しづまざるが如し。上下はかはれども、ほど〳〵につけて、たのめてん人の爲には、ゆめゆめうしろめたなく、腹黑き心のあるまじきなり。隱にては、又冥加をを思ふべきゆゑなり。箕子が、紂の心の修まらざる事を知りながら、佯りたはれてやつことなり、何曾が、晉の政のおとれるを諫めずして、家に歸りてしりうごとしける、これ等は、身のため

をたまへ、詔へるはからひにて、報國の臣にあらす。

【語釋】 ○孔子のたまへる事　これは「孝經」の諫諍章にある文をさして言つたものと思はれる。 ○諍ふ　對手に勝たうとして競爭する意味ではない。 先方の意志通りに唯々諾々として從ふのでなくて、自己の意志をのべて意見を呈することをいふのである。君や親の意志に道に反したことがあるときには、何處までも自分の意見を以て之を正さんとする等の事をいふのである。 ○知音　知己といふのと同じである。伯牙、鍾子期の故事より出てゐることは前にも述べた。 ○世の末　道のすたれた世をいふ。澆季といふも同じい。 ○人の習　人間の習慣的考をいふ。普通の人の普通の考ではの意。 ○心づきなし　氣に入らず、氣にくはぬこと。いやなこと。 ○いひかはす人　互に心の通じてゐる人のこと。 ○願を蒙る　恩顧をうけること。引立を蒙ることである。 ○其の人　自分に諫言を呈した人のことである。 ○はらぐろし　心ぎたなきこと。心の潔からぬこと。邪欲をさしはさむこと。窟地の惡いこと。 ○こはく　手ごはくの意。非常に強い態度を言つた副詞である。 ○讒嫉　佛語である。機嫉とも書く。讒はそしる嫉はうたがひきらふ義。俗に機と書くに到つたのは、人の氣合といふ程の意味に取つたものといふ。世人のそしりきらふこと、世人の不愉快に思ふことをいふのである。讒嫉をはゞかるといふのは、人の不愉快に思ふであらう事を豫め心に注意して慮り之をさけることを言ふ。 ○重き物なれども　「韓非子」に「千鈞得レ船則浮、錙銖失レ船則沈」とある。千鈞もある重い物でも船に載せれば浮かせることが出來る、錙銖（古の支那の最目で十黍を銖といひ、十銖を錙といひ、四十四銖を兩といひ、八兩を錙といつた）の如き僅かなる量でも、船を失へば沈んでしまふといふのである。 ○たのめても人自分が主人として仕へてゐる人。足利時代の語に「頼うだ人」といふのがあるが、やはり同意で自分の主人をさす。 ○うしろめたなく　「うしろめたなし」といふ形容詞の連用形である。この「なし」は有る無しの無しではなくて、その狀態にあることを示す接尾語で「奈なし」「勿體たし」「せはしなし」「荒げなし」みなこれである。從つて「うしろめたなし」といふのは「うしろめたし」と同義である。即ち「後日痛し」の義で、後の方氣がかりであること、うしろぐらい事である。 ○冥加　冥々に於ける神佛の加護をいふ。冥助といふに同じ。 ○箕子が紂の心の修まらざる云々「詳解」には「歴史綱鑑補」の「殷紀」の文があげてある。「殷紂淫虐甚、微子數諫不レ聽、乃與二大師少師一謀、遂去、箕子諫、亦不レ聽、或曰、可レ以去矣、箕子曰、知レ不レ用而言、愚也、殺レ身以彰二君之惡一、而設二於民一、吾不レ忍レ爲也。乃佯狂爲レ奴」 ○何曾が晉の政のおごれるを諫めずして云々　同じく「詳解」には「貞觀政要」の「君道篇」の文が引いてある。何曾は字は顯考、陳國陽夏の人である。魏に司徒として仕へてゐたのであるが、晉の受禪後、武帝にあげられて大傅となつた人である。 ○しりうごと　口を言ふこと。かげぐちのこと。 後言の音便で「しりうごと」といふ。かげでそしること、かげで人の惡

【通釋】 或人の言つたいましめごとである。孔子が嘗つて仰つしやつた事がある。「たゞ何でも一途に君の意志通りに從ひ奉るといふことばかりが忠義といふ譯ではない。同樣、ひたすら親の意志通りに從ふことばかりが孝行でもない。諫爭すべきときには諫爭し、柔順に從ふべき場合には唯々諾々として從ふといふのが、本當の忠義であり又孝行である」と。かういふわけであるから、主君でも父母でも或は親戚でも、はたまた知己朋友でも、誰でも、先方に惡い事があつた場合にはきつと諫言を呈するのが至當ではあると思ふけれども、世が末になつて世道人心が頽廢して來ると、どうもかうばかりにはゆかない。誰でも人情の常として、他人の一旦かうしようと思ひ立つてゐる事を、それはいけないと諫めるのは、まことに具合のよろしくないものである。それにしても平素から心の分つてゐる樣な間柄であれば、成程それもさうだと諫言の理のある所も了解出來るのであるから、天地自然の道理は諫める者の衷情をよく察して呉れてゐる譯ではあらうが、さて人間世界では必ずしもさうとばかりはゆかないの

で、主人の惡い所を諫める者は、主人の愚顧取立を失ふに至るものである。諫めを聞き入れずにやつた方の人は、自分の意志通りやつた事が中々思ふ樣にならなくて惡い結果を招く樣になると、自然、前の諫言も思ひ出されて、よく靜かに考へてみると、成程あの諫言は道理に叶つてゐたわいと合點も行くのであるけれども、又自分の考へが新しく起つて來て、何かやらうと計畫でもする時には、これを彼奴に聞かせると、又何のかのと七むつかしく諫めにかゝるだらうと思ふときづうるさいので、この計畫は彼奴には知らせまいと思ふ樣になるものである。これは實に馬鹿なことであるけれども、すべての人情の通有性なのであるから、意地惡く當らないやうに、又氣にくはぬ事のないやうにもてあつかふべきである。總體人が腹を立てゝをる時、しひて頑强に制しにかゝると、反對に益々立腹の度が高まるものである。盛に燃え上つてゐる火にすこしばかりの水をかけたところで何のやくにも立たないものである。だから對手の機嫌をよく考へて、感情を害ふ樣な機會を逸して、やはらかに眞綿で首をしめるといつたいものであるし、親に驕慢の心があつても、孝子が心を致してつゝしみ從つたならば、その一家は安全たるべきものである。重いものでも船に載せれば沈まないが、輕いものでも船を失ふと沈沒してしまふ。君や親はあたかもこの船上の物であり、臣や子は丁度この船に當るものである。君臣親子と位置に上下のちがひはあるけれども、身分相應に、自分が主人として仕へてゐる人のためには、決してうしろぐらい心や惡心を抱いてはならないことである。而してかげではどうか自分の主人に對して神佛の冥々の加護があるやうにと祈るべき次第である。箕子が紂王の心の修まらないことを知りながら、佯狂してやつこになつたり、何曾が晉の政の驕慢に失して正道を失つてゐるのを諫めないで、自家に歸つてかげ口をきいた等いふのは、何れも自己一身の安全を持して、諂諛をよそほへる惡行であつて、本當の忠臣のなすべき所業ではない。從つて箕子、何曾を何ぞ報國の忠臣と言ふことが出來よう。

第六の(一)

抑々松を貞木といふことは、まさしく人の爲に、彼の木の貞心あるにはあらず。雪霜のはげしきにも色を改めず、いつとなく緣なれば、これを貞心にたとふるなり。「勁松は年の寒きにあらはれ、忠臣は國の危きにみゆ」と、潘安仁が西征の賦にかけるは、この心なり。菅家太宰府におぼしめし立ちける頃、

こち吹かばにほひおこせよ梅のはな、あるじなしとて春なわすれそ。

とよみ置きて、都を出でて、筑紫に移り給ひて後、かの紅梅殿の梅のかた枝とび參りて生ひつきにけり。ある時此の梅に向ひて、

故鄕の花のものいふ世なりせば、いかにむかしの事を問はまし。

とながめ給ひければ、この木

先入於故宅。籬廢於舊年。麋鹿猶棲所。無主猶碧天。

と申したりけるこそ、あさましとも哀れとも、心も詞も及ばれね。

【語釋】 ○貞木　操正しい木。節操をかへぬ木といふこと。　○雪霜のはげしきにも色を改めず　これは論語の子罕篇に出てゐ

る。「歲寒、然後知二松柏之後凋一也」松柏の色の常緑であるといふことは、寒い時候にあつてみて始めてよく知れるものである。他の樹木が皆雪や霜のために色を變じてゐるにもかゝはらず、松柏はひとりその色を改めないといふのである。　○勁松は年の寒きにあらはれ云々　文選二の西征の賦に「勁松彰二於歲寒一、貞臣見二於國危一」と出てゐる。操たかき松は寒い年に際會して益々その秀れたるをあらはし、忠貞の臣は國歩艱難に際會して本當の所が知れるといふのである。　○潘安仁　潘岳の字である。

○西征の賦　潘安仁が京より秦に行つた時に作つたものである。　○菅家　菅原道眞公のこと。　○こち吹かばにほひおこせよ云々の歌　後拾遺集雜春の部に「流され侍りける時、家の梅の花を見はべりて。贈太政大臣」として出てゐる。集には第五句「春を忘るな」として出てゐる。「こち」は東風のこと。「ち」は「疾風」の「ち」と同じく風の意。東風にまづ南枝の梅は綻びるのである。「あるじ」はその家の主人である。筑紫に去つてゆく自分がこの家のあるじであるが、流謫の後は居ない譯であるから。「春な忘れそ」文法でいふ「なその格」である。なとそ」その間に勁詞の連用形（加變と佐變は未然形）を挾んで禁止を表はすのである。春を忘れるなといふ意味である。春が來て東風が吹いたならば、京からはるゝ〳〵遠い筑紫の空まで、薫を送つてよこせ梅の花よ、たとへこの家の主人はゐなくなつたとしても、春を忘れてはならないぞ。梅に對する愛着と、京を去り難き心情とが融會した哀歌である。　○紅梅殿の梅のかた枝　紅梅殿は「五條坊門西洞院、西北綾小路、南は坊門、西は洞院」（傍註）とも「五條坊門北町尻西、北野御子家、或天神御所（拾芥抄）ともある。道眞の家でそこに立派な紅梅があつたので人が後にかゝ呼んだものだらうといふ。梅のかた枝が筑紫まで飛んで來たといふことは源平盛衰記第三十二卷に「平家著二太宰府一、附北野天神飛梅事」として出てゐる。「北野天神は、依二時平大臣之讒訴一、延喜五年正月廿五日に安樂寺に遷され給ふ。住なれし故郷の戀しさに、常は都の空をぞ御覽じける。比は二月の事なるに、日影長閑に照しつつ、東風の吹けるに、思召出る御事多かりける中に

とち吹ばにほひおこせよ梅の花主なしとて春を忘るな

と詠じければ、天神御所、高辻、東洞院、江梅殿の梅の枝折て、雲井遙に飛行て、安樂寺へぞ參りける」（有朋堂本による）で「かた枝」はかた枝である。一方の枝である。　○故郷の花のものいふ世なりせば云々の歌　後拾遺集春の下に「世尊寺の桃の花をよめる、出羽守」として出てゐる。この歌を十訓抄の作者が附會してこゝに書いたのではなくて「古今著聞集」等にもやはり同じ所に出てゐるから、かういふ附會は早く行はれてゐたものと見える。歌の意味。若し故郷の花が人語を解し人語をあやつることが出來るのであつたなら、ありし昔の事をどんなにか尋ねもし語り合ひもしようものを、それは出來ないんだから詮方がない。　○先入二於故宅一云々　まづあたたのもと住んでをられた故宅に入つてみると、籬はすでに重る年月の間にこはれてしまつて影も無い。住むものとては麋（鹿の大なるもの）鹿ばかり、いはゞ鹿のすみかとなつて、主なきこの舊屋は、たゞ碧空の厳ふのみで、恰もこの青空が我ものと主がほに領してゐるといふ有樣である。　○心も詞も及ばれね　「ね」は打消の助動詞「ず」の已然形である。上に係助詞「こそ」があるからこの第三終止で結んだのである。心は想像をさす、詞はその表現をいふ。心の想像でもまた言葉の表現でも、どちらもその實情の眞には遠いといふのである。あさましさ哀れさを現はすことが出來ないといふのである。

【通釋】　そも〳〵松を貞木といふのは、本當は人に對する譬喩より言ふことで、彼の松の木が忠貞の心を持つてゐるといふのではない。雪や霜のはげしさに逢つても色を變へず、年が年中緑色を保つてゐるところから、これを貞操を持してゐる心にたとへていふのである。かの潘安仁が西征の賦に書いたといふ「操堅固なる松は寒さに逢つてみて始めて知れ、忠義の臣は國歩艱難に際會してみて始めて分る」といふ語はこの意味を言つたのである。貞木といへば單に松に限る譯ではない。梅こそ眞の貞木といふべきである。菅原道眞公が流されて太宰府に出立されようといふ時、

こち吹かばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春なわすれそ

とよんでおいて、都を出て行かれた。而して筑紫におはしましつかれて後、かの菅公舊居の紅梅殿にあつた梅の片枝が、筑紫まで飛んで來て生えついたといふ事である。菅公ある時この梅に向つて

故郷の花のものいふ世なりせばいかにむかしの事を問はまし

とよみかけてしばし見入つてをられたところが、この梅の木は口を開いて

先入二於故宅一。籬廢二於舊年一。麋鹿猶棲所。無レ主獨碧天。

と御答へしたといふ、木が物をいふといふのであるから實にあきれた事でもあるし、またその志の深さも思はれて、感ずるに餘あつて、想像や形容を絶した事といつてよい位である。誠に一日千里の野山を飛んで行つたといふ程の木であればこそ口も利いたものであらう。かういふ類こそ實は貞木と言つてよからう。

【評釋】　この一段は古今著聞集卷十九にも出てゐる。即ち次の通りである。

松樹を貞木といふ事は、まさしく人のために、かの木の貞心あるにはあらず。霜雪のはげしきにも、色をあらためず、いつも綠なれば、これを貞心にくらぶるなり。貞松は年の寒きにあらはれ、忠臣は國の危きに見ゆと、潘安仁が西征賦にかけるも、このこゝろなり。

菅家、太宰府におぼしめしたちける比、

こち吹かばにほひおこせよ梅のはなあるじなしとて春なわすれそ

とよみおき給ひて、都をいでて、筑紫にうつり給ひてのち、かの紅梅殿の梅の片枝飛び來りて、おひつきて

けり。ある時、かの梅にむかひ給ひて、

ふるさとの花の物いふ世なりせばいかにむかしのことをとはまし

とながめさせ給ひたりければ、かの木、

先入於二故宅一 籬廢二於舊年一 麋鹿猶棲所 無レ主獨碧天

かく申したりけるこそ、あさましともあはれとも心も詞も及ばね。

第六の（二）

廉直といふは、いひいづる事を、さなき由にあらがひせず、知らざる事を、知れり顏にもてなさず、契れる事を改めず、物をうらまず、喜をも、歎をもふかうせず、すべて直しきを宗として、まがれる心なきなり。日月は、一物のためにくらうせず、明王は、一人のために法をまげざるが如し。事により、人にしたがひて、うらおもてなく、親しきをもひかず、疎きをも隔てずして、ひとしき思ひをなす、これを賢人といひ、又廉士といふ。されば臣軌と申す文に、直臣の振舞を書きのべ、廉潔の章を分ちて立てたり。大かた事かくとも、得まじき人の物を得ず、たはぶれにも、すまじきほどのふるまひをせぬなり。叔齊　世を遁れんと思ひ立ちしより、周の粟をうけずして其の齒白かりき。成王、桐の葉を玉といひて、叔虞に賜はせけるをば、「天子に戲言なし」とぞ太史いさめ申しける。「孔子は、飲を盜泉の水に忍び、曾參は、車を勝母の里にかへす」などといへるは、惡しき文字をつけたるによりて、所の名をさへきらひけり。これただしき道を深うする故なり。和嶋と

荀勗とは、中書一官の監令にてありけれども、嶠まさに勗が心のへつらへるを嫌ひて、一つの車にのらざりけり。慾じて物にへつらひ、欲にすゝみ、虚言をかまふる者、盗をするたぐひ、只直しき心ひとつなきによれり。よく〳〵つゝしむべし。就中わが身は、たくはへもちながら、人の財をほしがり、直あらばいくらもかふべき物をも、力を入れじとて、無心をかへりみず、人に要事をのみいひかけ、剩へ不得の時は、かへりて恨をなすたぐひあり。かくの如きの人、形は人間にありといへども、心は先立ちて、餓鬼の因をむすびおくものなり。かへす〴〵も恥づべし恥づべし。よく〳〵思ふべし思ふべし。

【語釋】 ○廉直 清廉潔白なること。無欲にしていさぎよきこと。 ○さなき由 「さ」はその樣にの意、その樣ではないといふわけがら。 ○あらがひ あらそひに同じ。 ○宗として それを第一とすること。 ○日月は一物のために光をくらうせず 孝經の三才章に次の樣に出てゐる。「天地不レ爲二一物一枉中其時上、日月不レ爲二一物一晦中其明上、明王不レ爲二一人一枉中其法上」日月の公平であつて私なきことを言つたものである。 ○明王は一人のために云々 前述の孝經の說に基いたもので、明德の君王は一人の私のために天下の法をまげるやうなことはしないのである。 ○親しきをもひかず 自分に親密なものだからと言つてこれを特にとりたてるやうなことはしない。○疎きをも隔てず 上の反對である。親密でない關係のものでも用ふべきあらば之を擧用するので、敢て私的關係に拘泥しないことをいふのである。 ○臣軌と申す文に云々 臣軌十章の中の至忠章、公平章、匡諫章誠信章をさして「直臣の振舞を書きのべ」と言つたと詳解にも說いてゐる。廉潔章は別の一章となつてゐるので、「廉潔の章を分ちて立てたり」と言つてゐるのである。 ○事かくとも 如何に不自由をしてもの謂である。 ○叔齊世を遁れんと思ひ立ちしより云々 詳解では叔齊は、夷齊の誤りであらうと言つてゐる。周の粟を食はないで首陽山にかくれたのは勿論伯夷叔齊の二子であるから、二人の方が文としてはよいが、一人で代表させる意味で書いたかも知れないから、強ひて改めるにも及ぶまい。伯夷叔齊の二人は孤竹君の二子であつて、史記の周紀には次の樣に出てゐる。「周武王伐レ紂、伯夷叔齊叩レ馬諫レ之、王旣滅レ殷爲レ天子一、天下宗レ周、伯夷叔齊恥レ之、不レ食二周粟一、隱二於首陽山一、作レ歌、遂餓而死」。 ○其の齒白かりき 清廉潔白の意である。齒は上の粟に關係あるより言ひ、白いといふのは、惡いもので染まらないことで、一つには周の粟を食まなかつた事を具體的にさし、一つは精神的の形容として潔白の白と同意を表はしたのである。 ○成王桐の葉を玉といひて云々 成王は周の武王の子である。史記の晉世家には次の如く出てゐる。「成王與二叔虞一戲、削二桐葉一爲レ珪、以與二叔虞一曰、以レ此封レ汝、史佚因請二擇レ日立二叔虞一、成王曰、吾與レ之戲耳、史佚曰、天子無二戲言一、於レ是遂封二叔虞於唐一」叔虞は成王の弟である。史佚は太史で名を佚と言つたのである。太史といふのは支那周代の官職の名である。周代には冢宰の掌る六典、八法、八則を建て、王のために、邦國官府、都鄙の治をむかへ、邦國、官府、都鄙、萬民の聖辭奉書の副本を領し、厤を諸侯に分ち、その他、祭喪、會同、軍旅等の事に與つた官職である。「天子に戲言なし」は我國で「綸言汗の如し」「天子に二言なし」などいふに似た語である。 ○孔子は飲を盜泉の水に忍び云々 これは說苑の說叢篇に、「邑名二勝母一、曾子不レ入、水名二盜泉一、孔子不レ飲、醜二其名一也」と出てゐる。勝母は母に勝つ、勝るといふ樣な名であり、盜泉は盜人の泉といふ樣な名稱として不都合な名であるから、孔子も曾子も之をこゝろよしとしなかつたのである。 ○和嶠と荀勗とは中書一官の監令にて云々 これは晉書の列傳に出てゐる。「和嶠字長輿、汝南西平人、少有二風格一、厚自崇重、有レ盛二名于世一、累二遷中書令一、武帝深器二遇之一、舊監令共レ車入朝、時荀勗爲レ監、嶠鄙二勗爲人一、以二意氣一加レ之、每二同乘一高抗、專レ車而坐、乃使二監令一異レ車、自レ嶠始也」中書は中書省のこと、一官の監令といふのは、中書省の中書監と中書令といふのである。中書省は支那明朝以前の官衙の一で、中書の名は前漢の武帝に始つた。宮中にあつて天子に侍し王命の出納を掌つた。なほ後には行政をもあづかるに至つた。令はその長官で、監はその次官である。 ○直あらば

金錢を持つてゐたたらばの意。　○力を入れじとて　自分の所有してゐる財産に手をつけまいといふので、也人の所有物をしひてほしがるのである。　○無心　こゝでは憚りなく物をねだり求めることをいふ。　○心は先立ちて　まだ身體は死なないのに、心だけが先に死の世界にかゝづらはる事をいふ。　○餓鬼の因　餓鬼とは餓鬼道に住する亡者のことで、皮肉やせからびて常に飢渇に苦しんでゐるもの。因は業因のこと。業因とは過去の世でなしたことの善惡のむくい、主に惡い方にいふ。死んでから餓鬼道に落つる業因を現世で作つて置くといふのがこゝの意である。

【通釋】　清廉潔白といふのは、一寸口に言ひ出すことでも「それはさうではない」といふ樣に爭ひ反抗するといふことしないし、又知らない事を知つた樣な顏もしないし、一度約束したことは再び變改しないし、物を羨望し悲喜その度をすごすといふ樣なこともなく、すべて正直を第一として邪曲の心のない事を言ふのである。天にかゝれる日や月は、一物のために光をくらくすることはしない。その光は天下の光であつて私の光ではない。すぐれた君主は、一人のために天下の公法をまげるといふことをしない。これ眞に廉直の典型である。事件により、人によつて表裏黑白の差を設けず、親しきに媚びて情實を賣らず、疎きに恨んで隔てる事なく、すべて公平の態度を持して接する、これが賢人であり、廉士である。それであればこそ臣軌といふ書には、廉直の士の行を記しあげ、又廉潔に就いては章を分けて論じてをる。如何に自分に不自由を感じても、かりそめにも、得てならぬ人の物を望んだり、冗談にしても、なすまじき行ひをせぬが人の道である。廉直の精神である。叔齊は、義のために世を捨てようと決心してからは、操をたてゝ周の食物をはむことなく、廉潔の道を貫いた。又成王が桐の葉を玉だといつはつて、弟の叔虞に與へたのをみて、太子は之を諫めて「天子に戲言あるべからず」と言つた。孔子はよしんば渴しても盜泉の水に唇をふれず、曾參は勝母といふ里に車を乘入れなかつたのも、單に名稱に惡字が用ひてあるにすぎなかつたのだけれども、之を避けたのである。これ正しき道に對する良心の鋭敏さによるがためである。人間の正しい道に深く徹する所があるからである。又和嶠と荀勗とは、共に同じ中書省の中書監と中書令といふ僚役であつたのであるが、和嶠は荀勗にへつらふ心のあるを以て、一つ車に同乘することをいさぎよしとしなかつた。すべて物にこびへつらひ、欲心多く、虛言をたくむ者とか、盜をする樣なやからは、歸する所、正しき心一つを持してゐないからの事である。根本原因は皆この清廉潔白にあるのである。この點くれ〳〵も戒心しなければならない。その中でもとりわけ、自分で財産を所有してをりながら、人の財寶に目をくれ、金錢を出しさへすれば思ふまゝに買ひとる事の出來る物を、自分の財産に手をつけまいとして、しひて無心がましく他人に要求するばかりか、若し望んだものが得られない時には、却つて先方に對して恨怨を抱く等の輩がある。かくのごとき人は、形相は人間であつても、心は死に先立つて早くも餓鬼道に落つべき業因を現世で作つてゐるといふべきである。かへす〳〵も人間としての恥を知らなければならない事である。我々はよく〳〵熟慮しなければならない次第である。

完

昭和十年二月十五日印刷
昭和十年二月二十日發行

徒然草講義
十訓抄講義

定價二圓二拾錢

編輯兼發行者　國文學大講座刊行會
代表者　吉川與志次

印刷者　吉川與志次
東京市神田區小川町三丁目二四

◇發行者　東京市神田區小川町三丁目二四
日本文學社

國文學大講座 各專門大家執筆

◉本書は嘗て本會に於て出版して嘖々の好評を博し本書のみによつて文檢に合格した篤學の士數百、引續き本會は續國文學講座江戸文學講座を出版しましたが國文學大講座は三書の内特に文檢受驗者必須なるものを選擇統一したものである。

◇國文學史	文學博士 藤井乙男著	菊判 三〇〇頁	送料 二錢	價 一圓五十錢
◇國語學史（併概說）	文學博士 吉澤義則著	菊判 四〇〇頁	送料 二錢	價 一圓八十錢
◇古事記選釋	三高教授 阪倉篤太郎著	菊判 三八六頁	送料 二錢	價 一圓八十錢
◇萬葉集選釋	京大助教授 澤瀉久孝著	菊判 二八八頁	送料 二錢	價 一圓五十錢
◇源氏物語講義	奈良女高教授 岩城準太郎著	菊判 四〇〇頁	送料 二錢	價 一圓八十錢
◇枕草子選釋	三高教授 島田退藏著	菊判 四五〇頁	送料 二錢	價 一圓八十錢
◇平家物語講義	東京女高師教授 石川佐久太郎著	菊判 二一〇頁	送料 二錢	價 一圓八十錢
◇古今和歌集選釋	文學博士 尾上八郎著	菊判 二一〇頁	送料 二錢	價 一圓八十錢

國文學大講座 各專門大家執筆

◇文法及口語法	奈良女高師教授 木枝增一著	菊判 六五六頁	送料 四錢	價 三圓十錢
◇言語學概論	文學博士 新村出著	菊判 三一八頁	送料 二錢	價 一圓八十錢
◇謠曲講義	東京文理大教授 能勢朝次著	菊判 三三六頁	送料 二錢	價 一圓五十錢
◇有職故實	風俗研究所長 江馬務著	菊判 三五六頁	送料 二錢	價 一圓八十錢
◇俳句選釋	京大助教授 頴原退藏著	菊判 三二六頁	送料 二錢	價 一圓五十錢
◇新古今和歌集講義	女子學習院教授 佐成謙太郎著	菊判 二一六頁	送料 二錢	價 一圓八十錢
◇王朝文學概論	文學博士 吉澤義則著	菊判 二一〇頁	送料 二錢	價 一圓八十錢
◇國文學問題詳解	京都女專教授 田中健三著	菊判 三五八頁	送料 二錢	價 一圓五十錢
◇近世和歌史	東京文理大教授 能勢朝次著	菊判 三四二頁	送料 二錢	價 一圓五十錢

國文學大講座

各專門大家執筆

◇江戸文學概說　文學博士　藤井乙男著　菊判二二八頁　價二圓　送料二十錢

◇更科、泉式部、紫式部日記講義　宮田和一郎著　菊判四六八頁　價二圓五十錢　送料二十錢

◇西鶴五人女評釋　鈴木敏也著　菊判三八四頁　價二圓五十錢　送料二十錢

◇大鏡增鏡鏡類選釋　金子原亮一雄堀江秀荒瀬邦介著　菊判五六八頁　價二圓三十錢　送料二十錢

◇保元物語大平記選釋　清水泰清藤衛著　菊判二二八頁　價二圓五十錢　送料二十錢

◇徒然草講義　十訓抄講義　女高師教授　金子彦二郎木枝增一著　菊判二九〇頁　價二圓四十錢　送料二十錢

◇江戸時代風俗史　風俗研究所長　江馬務著　菊判二六八頁　價二圓四十錢　送料二十錢

落